神戸大学
全学共通授業科目
外部評価報告書

神戸大学　大学教育推進機構
教養教育院　外国語第 II 教育部会

2024 年 3 月

目次

第 1 部　自己点検・評価報告書

第 1 章 はじめに 3

1.　本外部評価報告書執筆の基本理念 3
2.　執筆者 3
3.　本学未修外国語教育カリキュラム概要 3
3.1 未修外国語の開講科目 3
3.2 外国語第 III 4
3.3 多言語セミナー（その他の外国語） 4

第 2 章 自己点検・評価 6

1.　神戸大学における教養教育の目標 6
2.　外国語第 II 部会の組織と運営体制 8
3.　授業の実施 10
3.1 クラス分け 10
3.2 共通シラバスの活用 12
3.3 成績評価 14
3.4「外国語教育ハンドブック」および学習サイト 15
3.5 授業評価アンケート 15
3.6 海外留学支援事業との連携 16
3.7 自己評価 23
3.8 全学共通教育ベストティーチャー賞 24

第 3 章 各言語における教育の取り組み 25

1. ドイツ語 25
2.　フランス語 27
3.　中国語 30
4.　ロシア語 32

第 4 章「外部評価の項目モデル」に沿った自己点検 ・評価 35

1. 自己点検・評価及び外部評価の評価項目モデル 35

第５章 １巡目の外部評価結果を受けての自己点検・評価 40

1. １巡目の外部評価結果およびそこで明らかとなった当該部会の課題等 40
2. 課題等に対する、当該部会の取り組み・改善への自己点検・評価 40

巻末補足資料 45

シラバス例、2023 年度ドイツ語、フランス語教科書一覧、外国語第 II クラス分け基準

第２部　外部評価報告書

1. 外部評価委員会次第 58
2. 外部評価報告書 59
3. 参考資料（2016 年度外部評価報告書） 64

第１部　自己点検・評価報告書

第１章　はじめに

1.　本外部評価報告書執筆の基本理念

本教育部会外部評価は，2016 年 6 月 9 日「評価・ FD 専門委員会決定 」に基づき，実施するものである。評価書の構成は，大学評価・学位授与機構による「H24 年度以降の大学評価新基準」等を参考に作成された本学「外部評価の項目モデル（改訂版)」に準拠する。

2.　執筆者

2023 年度外国語第 II 教育部会幹事会が本報告書作成を担当した。幹事会の構成は、以下の４名である。

部会長　林良子（国際文化学研究科　教授）
幹事　　フランス語：中畑寛之（人文学研究科　教授）
　　中国語：高橋康徳（大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター准教授）
　　ロシア語：髙田映介（国際文化学研究科　講師）
　　ドイツ語：林良子（部会長は担当言語の幹事を兼ねる）

3.　本学未修外国語教育カリキュラム概要

3.1 未修外国語の開講科目

神戸大学においては、2023 年度現在、いわゆる第二外国語として、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語を必修科目として開講している。なお、本学においてはいわゆる大学における英語の他の選択必修科目の外国語について、英語が既修であるのに対し、「未修外国語」という語を用いている。

未修外国語の科目は、必修科目である「ベーシック科目」と選択科目である「アドバンスド科目」に分かれる。神戸大学では外国語科目はクオーター開講であり、１クオーターは授業実施数 90 分７回＋45 分１回で、８回目は期末テスト実施期間となり、この期間中に期末試験をすることが多い。

ベーシック科目は、初級Ａが「文法クラス」、初級Ｂは「実践クラス」と位置付けられ、１年次に初級Ａと初級Ｂの週２回の授業を受けることになる。この２つのクラスＡ・Ｂは知識と実践という相互補完的な関係にある。また各クオーターでの学習内容は積み上げ式になっており、前クオーターの学習内容を前提として１年間４クオーターで継続的に基礎的な語学力を習得する。各授業はそれぞれ 0.5 単位であり、ベーシック 8 科目で４単位取得が必修となっている。

ベーシック科目の中には、図１には含まれないが、初級ＳＡ・ＳＢというインテンシブクラスを設けている。これは、ロシア語を除く、ドイツ語・フランス語・中国語の３言語では、１年次後期の第３・第４クォーターにおいて、「Ａ３・Ｂ３」「Ａ４・Ｂ４」の代わりに、「ＳＡ３・ＳＢ３」「ＳＡ４・ＳＢ４」という名称のインテンシブ・クラスを選択することができる（通称「Ｓクラス」)。独・仏・中のいずれの言語でも、ネイティブスピーカーの教員と日本人教員が連携して授業を担当し、開講時間は全学部の学生が履修できるよう、共通で火曜５限と木曜５限に開講されている。このクラスには、当該言語圏への留学を目指す学生など、未修外国語の学習により強い興味を持つ学生が集まる（ただし、医

学部の学生はカリキュラムの都合上この授業を選択することができない)。

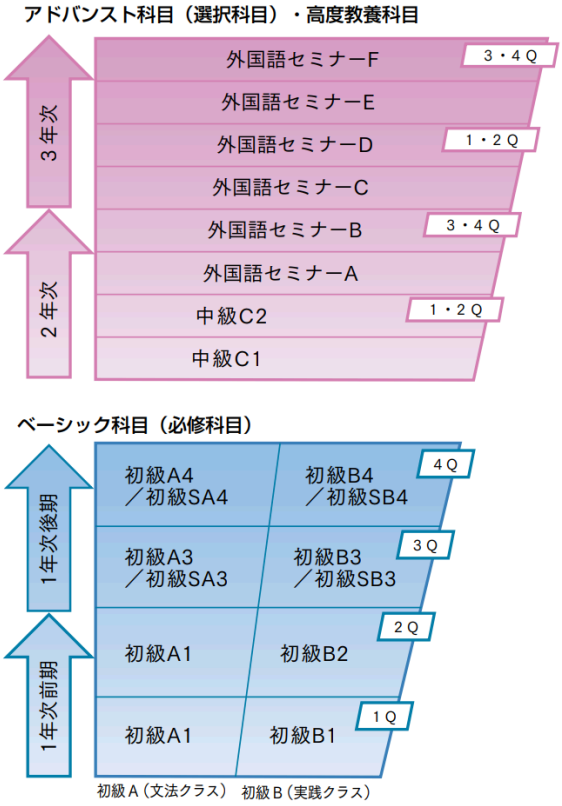

図１　未修外国語（外国語第 II）の科目構成（出典：「神戸大学外国語教育ハンドブック 2023」p.20）

アドバンスド科目は、１年次の学習を継続し、さらに深めたいという学生を対象とし、選択科目として提供されている（ただし２年次からキャンパスの異なる医学部、海事科学部は履修ができない)。２年次後期からは、教養教育院が全学を対象に提供する授業科目群「高度教養科目」として「外国語セミナーA・B・C・D・E・F」としてそれぞれの未修外国語で開講されている（例)「外国語セミナーA（ドイツ語)」。「高度教養科目」とは、2016 年度以降に入学した全ての学部の学生に対して、必修科目として位置付けられている科目で、様々な分野において開講される科目から、自分の関心に適した科目を選択し、卒業要件単位数として合計４単位を履修することが義務付けられている。その単位数は１クオーターで１単位となる。

3.2 外国語第 III

必修未修外国語４言語のうち、ドイツ語とフランス語については外国語第 III という選択科目を設けており、第１クオーターから第４クオーターまで「第三外国語（ドイツ語)」「第三外国語（フランス語)」という名称で開講されている。

3.3 多言語セミナー（その他の外国語）

神戸大学では上記の４言語以外にも、2023 年度より、「多言語セミナー」としてスペイ

ン語、イタリア語、韓国語、ラテン語の授業を開講している。これは、従来第三外国語として開講されていたイタリア語、韓国語、スペイン語の 3 言語が、2017 年の国際人間科学部の設置にあわせ、学部開講科目（ただし全学部の学生が履修可能）として、ラテン語を追加して開講していたものを、本年度より「多言語セミナー（イタリア語)」のような形で教養教育院が第 1 クオーターから第 4 クオーターまで通年で開講するものである。この多言語セミナーは、学内または海外からの研究者等の申し出により開講することができるように、ある程度柔軟性をもって設計されており、2023 年度には第 3 、第 4 クオーターにウクライナ語を開講した（2024 年度も同様に開講予定)。

第２章　自己点検・評価

1. 神戸大学における教養教育の目標

神戸大学は、「学理と実際の調和」という開学以来の教育方針の下、教育憲章に示された「人間性」「創造性」「国際性」「専門性」を高める教育を実施するとともに、各学部がグローバル化に対応した様々な教育プログラムを開発してきた。このようなプログラムに参加する学生だけではなく、全ての学生を、自ら地球的課題を発見し、その解決にリーダーシップを発揮できる人材へと育成することが学士課程の課題である。そこで、全学部学生を対象とする教養教育において、神戸大学の学生が卒業時に身につけるべき共通の能力を「神戸スタンダード」として明示し、その修得を教育目標とする。

神戸スタンダード

➢ 複眼的に思考する能力

専門分野以外の学問分野について基本的なものの考え方を学ぶことを通して複眼的なものの見方を身につける

➢ 多様性と地球的課題を理解する能力

多様な文化、思想、価値観を受容するとともに、地球的課題を理解する能力を身につける

➢ 協働して実践する能力

専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力と、困難を乗り越え目標を追求し続ける力を身につける

神戸大学の教育課程のうち、教養教育に相当するものは、全学共通授業科目として教養教育院が開講している。「神戸スタンダード」を全学部生が身につけるため、主として１・２年生が学修する「基礎教養科目」及び「総合教養科目」を設けている。また１・２年生だけでなく専門分野を学んだ高学年も対象とする科目として、「高度教養科目」を設け、４年間を通じて学ぶ教養教育のカリキュラムを提供している。

全学共通授業科目は、表１のように、基礎教養科目、総合教養科目、外国語科目、情報科目、健康・スポーツ科学、共通専門基礎科目から成る。各科目群の下に授業担当の教員が所属する「教育部会」がある。外国語科目のうち、外国語第 I はいわゆる大学入学前に学んだ「既修」の外国語である英語を指し、外国語第 I 部会を成す。外国語第 II は「未修外国語」と呼ばれ、入学後に必修選択するいわゆる第二外国語科目であり、神戸大学においてはドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語の４言語のうち１つを必修とする。つまりこれらの言語の担当教員が外国語第 II 部会に所属することとなる。

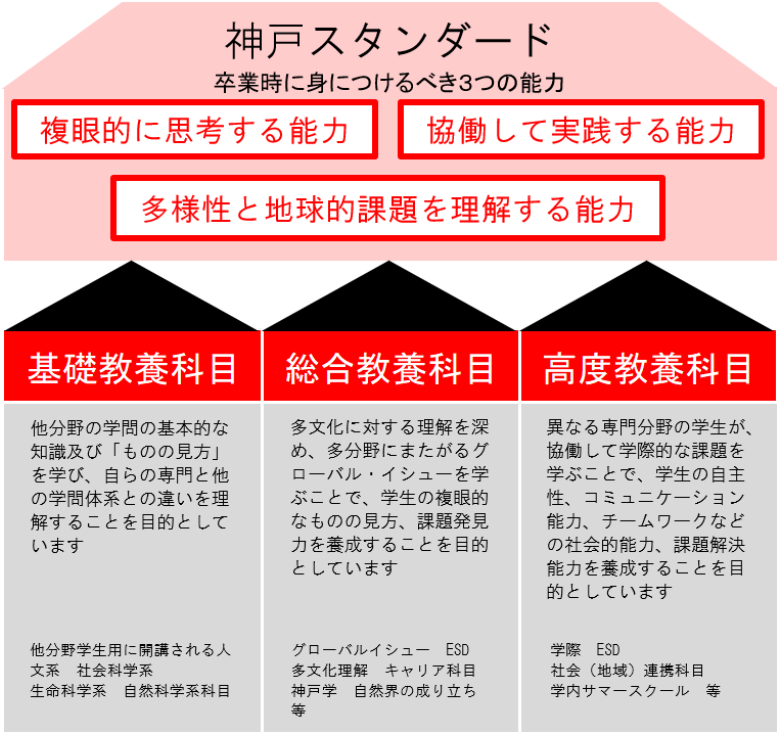

図２　神戸スタンダードと全学共通教育
https://www.office.kobe-u.ac.jp/stdnt-kymsys/student/blue12/index_kobestanderd.html#a1
（2024 年 1 月 4 日閲覧）

表１　教育部会一覧

教育部会一覧 情報科学 健康・スポーツ科学 人間形成と思想 文学と芸術 歴史と文化 人間と社会 法と政治 経済と社会 数学 物理学 化学	生物学 地球惑星科学 図形科学 応用科学技術 医学 農学 ESD データサイエンス 学際 外国語第 I (英語) 外国語第 II（ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語）
【全学共通授業科目の学修目標】によれば、外国語第 II の学修目標は、以下のとおりである。	

○ 外国語第 II

グローバル化があらゆる分野にまで浸透し、人びとを取り巻く多文化状況が日常化してきた今日、英語プラスもう一つの外国語の基礎的な学力と教養を身に付けることが必要で

ある。そこでドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語のうち、一つの語学を選択し、1年次では、発音・文法・語彙・文章表現などの初級レベルの基礎的修得を目指す。2年次では、より高度な文法事項の理解や読解力・表現力などの中級レベルの修得を目指す。3年次では、多様なトレーニングを通して、社会・文化背景などの知識を身につけながら、実践的な運用能力をさらに向上させることを目指す。

https://www.kobe-u.ac.jp/campuslife/edu/outline/general.html（2024 年 1 月 10 日現在）

2. 外国語第 II 部会の組織と運営体制

神戸大学は組織が複雑である。図 3【大学教育推進機構の組織図】にあるように、各種研究科、学部等の部局の他に共通教育を担当する責任部局として大学教育推進機構がある。機構長はグローバル・教育担当理事の大村直人氏である。なお、大村理事は、大学教育推進機構長の他に、教学 IR 推進室長、異分野共創型教育開発センター長を兼務しており、学生、入試、附属学校、図書館等の業務の担当もされている。

教育の実施（授業担当）部署が教養教育院であり、現在の院長は大学院システム情報学研究科教授の菊池誠氏である。

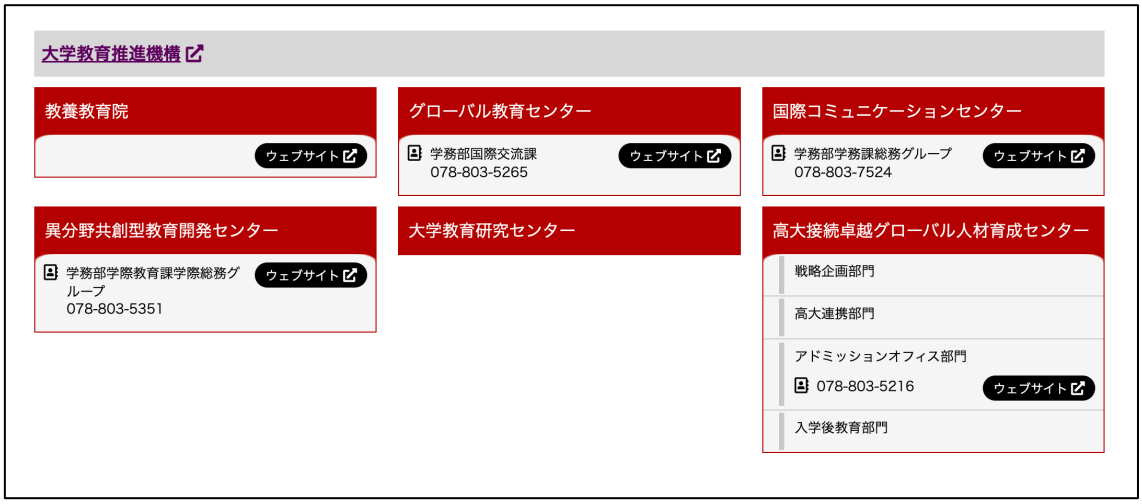

図 3【大学教育推進機構の組織図】
http://www.iphe.kobe-u.ac.jp/jimu/kyomu/zengaku/sosiki.html （2024 年 1 月 4 日現在）

外国語第 II 部会所属教員一覧を表 2 に示す。ここには、外国語第 I 部会、外国語第 II 部会ともに、大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター、国際文化学研究科、人文学研究科の 3 部局に所属する専任教員から構成されている。大学教育推進機構国際コミュニケーションセンターには、ドイツ語およびフランス語母語話者の特任教員が各 1 名ずつ配置されている（2023 年度はフランス語特任教員が不在）。

2023 年度より導入された「多言語セミナー」はすべて非常勤講師が担当しており、また同年に新規に開講された本学への留学生と日本人学生が共修する「複言語共修セミナー（タンデム）」「複言語共修セミナー（外国語としての日本語）」担当教員も外国語第 II 部会所属であるが、未修外国語の授業運営等には関わっていない。

部会長は「神戸大学大学教育推進機構の教育部会に関する内規」により各部会において選出される。外国語第 II 部会においては毎年行われる総会において、他部会と兼任のない

教授を被選挙人として選挙を行う（任期２年）。部会長は、毎月開催される教養教育委員会に出席し、幹事と連携しながら、日常の部会運営をしている。具体的には、TA・SA の任用、非常勤講師の要求、開講形態（対面かオンラインか）の照会、部会構成員名簿の更新、毎年度末に実施する担当教員の自己点検・評価のとりまとめ等を行う。

表２　外国語第 II 教育部会　名簿
（ドイツ語）

No.	職名	氏名	主配置部局
1	講師	安田　麗	大学教育推進機構
2	助教	芹澤　円	大学教育推進機構
3	特任助教	Christopher Schelletter	大学教育推進機構
4	教授	増本　浩子	人文学研究科
5	准教授	久山　雄甫	人文学研究科
6	教授	上野　成利	国際文化学研究科
7	教授	林　良子	国際文化学研究科（部会長）
8	教授	藤濤　文子	国際文化学研究科
9	准教授	石田　圭子	国際文化学研究科
10	講師	新川　匠郎	国際文化学研究科
11	講師	衣笠　太朗	国際文化学研究科

外国語第 II（フランス語）

No.	職名	氏名	主配置部局
1	准教授	廣田　大地	大学教育推進機構
2	教授	中畑　寛之	人文学研究科（幹事）
3	講師	廣田　郷士	人文学研究科
4	教授	岩本　和子	国際文化学研究科
5	講師	石田　雄樹	国際文化学研究科
6	講師	礒谷　有亮	国際文化学研究科
7	助教	鹿野　祐嗣	国際文化学研究科

外国語第 II（中国語）

No.	職名	氏名	主配置部局
1	准教授	髙橋　康徳	大学教育推進機構（幹事）
2	講師	陳　暁	大学教育推進機構
3	教授	康　敏	国際文化学研究科
4	教授	谷川　真一	国際文化学研究科
5	講師	李　昊	国際文化学研究科

外国語第 II（ロシア語）

No.	職名	氏名	主配置部局
1	講師	髙田　映介	国際文化学研究科（幹事）

外国語第 II（その他の言語）

No.	職名	氏名	主配置部局
1	准教授	黒田　千晴	大学教育推進機構グローバル教育センター
2	特命講師	村山　かなえ	大学教育推進機構異分野共創型研究開発センター

3. 授業の実施

3.1 クラス分け

未修外国語は 1 年次の必修科目であるため、2018 年度から入学予定者を対象に、4 言語のうちどの言語の学習を希望するかという希望調査を行い、入学手続き時に提出してもらっている。希望調査は第一希望、第二希望、第三希望まで行う。ただし、特定の言語の学習を希望する場合、それを追記してもらうことにしている（例：将来国連職員になりたいのでフランス語を履修したい。ドイツ文学に興味があるのでドイツ語を学びたい等）。この調査結果をもとに、毎年 4 月初めにクラス編成会議を行い、クラスサイズが 35 名を超えないように調整を行う。第一希望言語調査結果については、学部別に図 4 ～図 7 に希望者数の推移示した。最終調整結果を反映したクラス一覧（2023 年度）は巻末資料に示す。

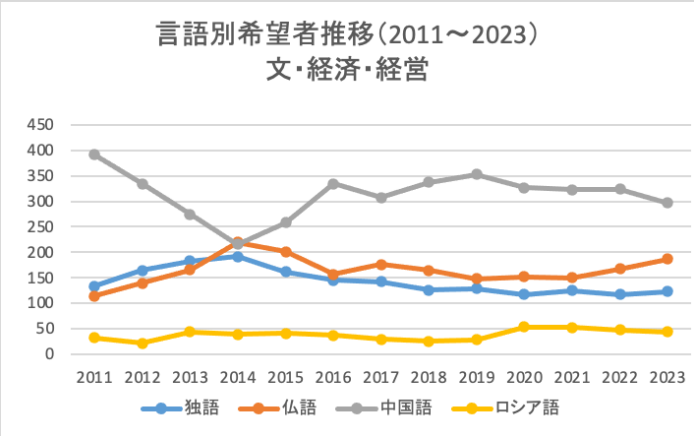

図４　言語別希望者推移（文学部・経済学部・経営学部）

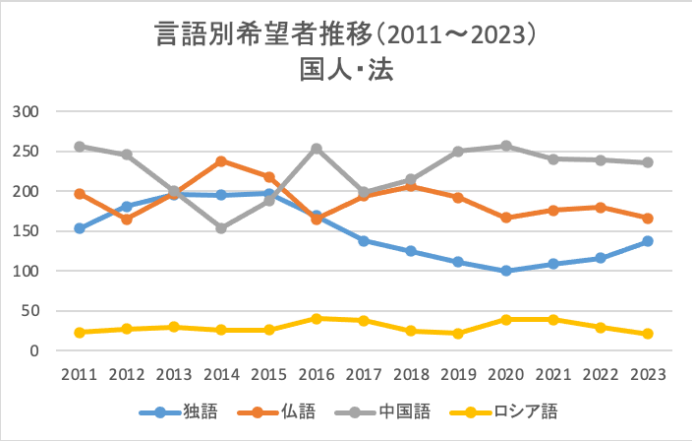

図５　言語別希望者推移（国際人間科学部・法学部）

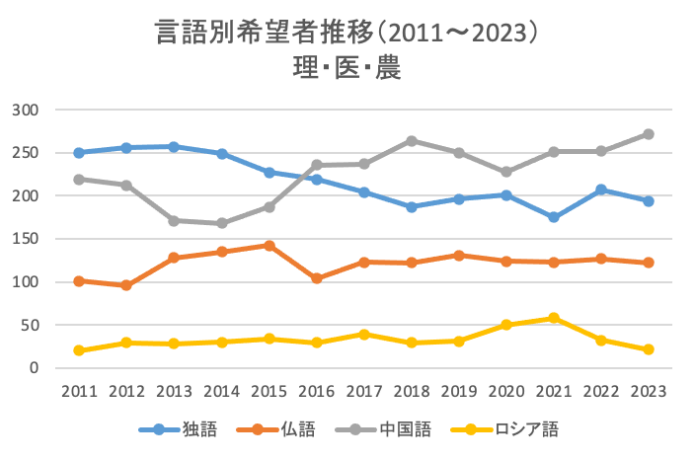

図６　言語別希望者推移（理学部・医学部・農学部）

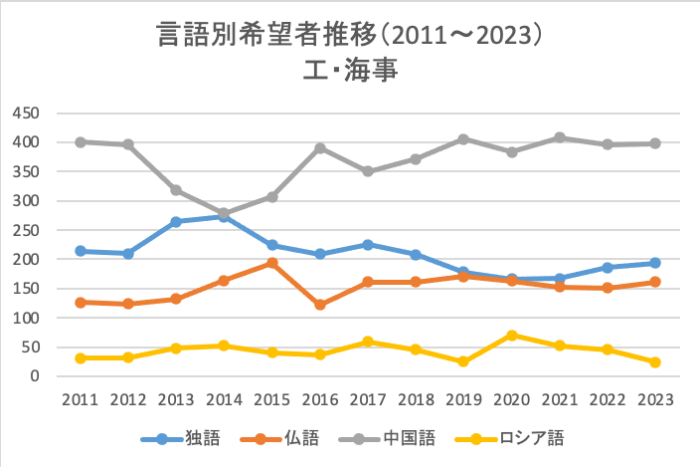

図７　言語別希望者推移（工学部・海事科学部）

図４～７に見られるように、入学者の半分以上が中国語を希望していることがわかる。ついで、理科系の学部ではドイツ語、文科系の学部ではフランス語の希望者が多い。クラスサイズやクラス開講数の制約により、中国語第一希望者から第二希望の言語に割り当てられることが多い。

3.2 共通シラバスの活用

１年次初級Ａ・Ｂについては、言語ごとに共通シラバスを作成し、内容を平準化している。シラバス作成時に、「授業のテーマ」、「授業の到達目標」には、予め以下のような文が入力してあり、各担当教員は共通シラバス部分を確認し、場合によっては修正し、シラバスのその他の項目「授業の内容と計画」「成績評価方法」「成績評価基準」「履修上の注意」「事前・事後学修」「オフィスアワー・連絡先」「学生へのメッセージ」「今年度の工夫」「教科書」「参考書・参考資料等」「授業における使用言語」「キーワード」「参考URL」を入力する。

以下に各言語の初級授業の「授業のテーマ」および「授業の到達目標」を示す。

（ドイツ語）

授業のテーマ：この授業では基礎的なドイツ語の知識を文法を中心に体系的に学習します。外国語第 II（未修外国語）としてドイツ語を選んだ人が必ず履修しなければならない科目です。ドイツ語は、今日、東西両ドイツの統一と欧州連合(EU)に基づくヨーロッパ統合を経て、さらに中東欧への市場拡大の時代を迎え、ますます情報伝達の手段としての役割を顕著にしてきています。幅広く国際社会で活躍しようとする人にとっても、多彩で奥行きのあるヨーロッパの歴史や文化に関心のある人にとっても、また環境問題のような現代的な課題に取組もうとする人にとっても、ドイツ語を学ぶ意義はきわめて大きいといえるでしょう。そうしたドイツ語圏に関する知識を得、理解するための第一歩としてドイツ語の基礎をしっかり身につけることが初年度の授業のテーマです。

授業の到達目標：ドイツ語の基礎的な文法知識や日常的なコミュニケーションの基本的表現などの習得をとおして、基礎的なドイツ語能力（読む・書く・聞く・話す力）を身につけることを目標とします。

（フランス語）
授業のテーマ：「明晰でないものはフランス語ではない」という有名な言葉があるように、フランス語はとても合理的で明快な構造を持っている言語です。フランス語の学習を通じて、言葉自体の面白さを味わうとともに、豊かな歴史や文化に触れたいと思います。なぜなら言語を学ぶことは文化を学ぶことでもあるからです。またフランス語は英語とともに重要な国際共通語であり、国連や EU の公用語であるだけでなく、中東やアフリカの多くの国々、アジアやアメリカの一部でも使われています。フランス語を知ることによって、現代世界における政治、経済、社会問題にも視野を広げ、英語一辺倒ではない世界を知ってほしいと思います。

授業の到達目標：フランス語の基礎的な文法知識や日常コミュニケーションの基本的表現などの習得をとおして、基礎的なフランス語能力（読む・書く・聞く・話す力）を身につけることを目標とします。フランス語初級Ａ１は、フランス語学習の第１クォーターの授業として、フランス語初級Ｂ１と相補的に、フランス語によるコミュニケーションや読解の基礎となるフランス語文法の習得をめざします。

（中国語）
授業のテーマ：皆さんが中国語を学ぶ意義は、次の４点にあります。
　第１に、世界の人口の４分の１近くの人々が中国語を曲がりなりにも話せます。中国大陸と台湾の人口に世界各地の華僑・華人を加えると約 14 億人になります。
　第２に、中国語はアジアの言語の中で唯一、国連の公用語として使われています。
　第３に、中国と日本とは一衣帯水の位置関係にあります。日中双方で互いの言語を学ぶ人々が増えることは、両国民の間の相互理解と交流の促進につながります。
　第４に、近年、経済や文化の交流が著しく進展したことによって、中国語を実践的に使う機会もますます多くなってきました。米国やヨーロッパ諸国でも中国語学習ブームが起こっています。
授業の到達目標：この授業の目標は、次の２点からなります。
1. 中国語の会話、文法、作文、読解の基礎を身につける。
2. 中国の社会や文化に対する興味を喚起し、中国語を独習する力を培う。

（ロシア語）
授業のテーマ：ロシア語学習の第一歩は文字をしっかり覚えることです。キリル文字といって、ギリシャ文字に似た独特の文字を使います。発音の規則がそれほど複雑ではないので、文字をしっかり覚えれば、文章を声に出して読むのは比較的簡単です。
　単語はコツコツと覚える必要があります。ロシア語も英・独・仏語などと同じインド・ヨーロッパ語の仲間なので、単語や表現に似ているものもありますが、かなり違うものも多いのです。声に出して繰り返し発音することで、ロシア語の音に慣れると覚えやすくなるかもしれません。
　ロシア語の難しさでもあり、醍醐味でもあるのが、変化が沢山あることです。授業では１年間かけて少しずつ学びます。新しく学ぶことが多いので、きちんと授業に出て説明を聞くこと、復習をしっかりすることが絶対に必要です。たとえていえば、急だけれど低い山のようなもの。確かに最初こそ大変ですが、変化を覚えてしまえば、読んだり話したりすることがかなり出来るようになります。

ロシア語が理解できるようになれば、チェコ語、ポーランド語、ブルガリア語など、同じスラヴ語群に属し、ロシア語と共通点の多い言葉も学びやすくなり、新しい世界が広がることでしょう。

授業の到達目標：１年次の授業では、基礎文法を理解するとともに、挨拶を含め、簡単な表現を使えるようになることが目標です。

3.3 成績評価

授業担当教員は１００点満点の素点で採点し、学生には５段階評価（秀・優・良・可・不可）で通知する。評価基準は以下の通りである。

表３「神戸大学における成績評価方針」

成績		素点	内容
秀	S	90-100	学修の目標を達成し、特に優れた成果を収めている。
優	A	80-89	学修の目標を達成し、優れた成果を収めている。
良	B	70-79	学修の目標を達成し、良好な成果を収めている。
可	C	60-69	学修の目標を達成している。
不可	D	59 以下	学修の目標を達成していない。

https://www.office.kobe-u.ac.jp/stdnt-kymsys/student/green/study/grade.pdf
（2024 年１月２４日閲覧）

上記「神戸大学における成績評価方針」５．にあるとおり、「秀」と「優」の合計比率を履修者の概ね 40%程度を上限とすることを目安としているが、同６．で「各学部及び教養教育院の各教育部会は、特別な理由により上限を適用しない授業科目を定めることができる。」とあり、外国語科目は教養教育院において上限を適応しない授業科目となっている。しかしながら、各教員間で評価の差があまりにも大きくならないよう、２クオーターごとに各授業における成績評価の分布について、部会長に知らされ、幹事にも共有されている。例えば、特に秀や不可が多すぎるような成績評価をする授業があれば、部会長や幹事より担当教員に事情を聞くなどの対応をとることが可能となっている。

3.4「外国語教育ハンドブック」および学習サイト

神戸大学入学後、１年次の最初に未修外国語の授業では、「外国語教育ハンドブック」を用いた授業ガイダンスを行っている。従来は紙媒体の冊子を新入生に配布していたが、2023 年度からは以下の URL から電子媒体をダウンロードする形となった。
http://www.iphe.kobe-u.ac.jp/solac/undergraduate.html
（「神戸大学全学共通教育　外国語教育ハンドブック　2023 年度版」）

編集・発行は、主に国際コミュニケーションセンター配置教員が部会と連絡をとりながら行っている。その他の学習情報の発信は、フランス語では、国際コミュニケーションセンター活動の一環として学習サイトにて学習情報を発信している。
http://www.iphe.kobe-u.ac.jp/solac/france/
（国際コミュニケーションセンター　廣田大地准教授によるフランス語学習サイト）

3.5 授業評価アンケート

全学共通科目の受講生は、各クオーター終了時に、授業アンケートをオンラインで提出する。学生による授業評価の項目は以下の通りである。結果については半期ごとに集計され、部会長宛に内容が通知される。部会長は、アンケート集計結果を見て気がついたことがあれば、各言語の幹事に相談できる体制がとられている。

●「授業振り返りアンケート」共通質問項目
【設問１】（自己学修）この授業に関して、平均して毎週どれくらい自己学修(予習、復習を含む)をしましたか。
１．１８０分以上、２．１２０分以上－１８０分未満、３．６０分以上－１２０分未満、４．３０分以上－６０分未満、５．０－３０分未満

【設問２】（授業理解）この授業の内容はよく理解できましたか。
１．そう思う、２．どちらかといえばそう思う、３．どちらともいえない、４．どちらかといえばそう思わない、５．そう思わない

【設問３】（達成度）シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。
１．十分に達成できた、２．ある程度達成できた、３．どちらともいえない、
４．あまり達成できなかった、５．達成できなかった、６．到達目標が分からない、７．シラバスを読んでいない

【設問 4】（振り返り）この授業を振り返って自らの学修に関する感想があれば書いてください。（自由記述）

【設問５】（授業改善）この授業でより工夫してほしい事項があればチェックしてください(複数可)。
１．担当教員の授業への熱意、２．担当教員の学生に対する接し方、３．担当教員の話し方、４．BEEF 等の学修支援システムの内容、板書、教材等、５．シラバス、６．授業の進み方・計画性、７．特になし

【設問４】この授業を振り返って、自らの学修に関する感想があれば書いてください。

【設問５】この授業でより工夫してほしい事項があればチェックしてください(複数可)。
１．担当教員の授業への熱意、２．担当教員の学生に対する接し方、３．担当教員の話し方、４．BEEF 等の学修支援システムの内容、板書、教材等、５．シラバス、６．授業の

進み方・計画性、７．特になし

【設問 6】（自由記述）この授業で良かった点について、特記すべき内容があれば書いてください。また、授業をより良くするための意見・要望があれば書いてください。

●教養教育院の独自質問項目
【設問 7】（総合判断）総合的に判断して、この授業は有益であったと思いますか。
１．有益であった、２．どちらかといえば有益であった、３．どちらともいえない、４．どちらかといえば有益ではなかった、５．有益ではなかった

【設問 8】（推薦の設問）あなたはこの授業の担当教員を全学共通教育ベストティーチャー賞に推薦したいと思いますか。（複数授業での推薦可）
はい、いいえ

3.6 海外留学支援事業との連携

神戸大学は、海外の多くの協定校を持ち、交換留学を実施している。未修外国語の学習者には、当該言語を使用する国への留学を希望する者もおり、中級以上のクラスでは留学に関する情報提供や支援を積極的に行っている。協定校には、全学部・研究科の学生が留学可能な大学間協定校と、各学部・研究科が独自に交換協定を結ぶ部局間協定校がある。部局間協定校への留学生の選抜は各部局で行われるが、大学間協定校の場合は年２回、春と秋に募集があり、本学国際交流課に申請を行った後、書類審査および面接試験で決定される。
https://www.kobe-u.ac.jp/international/study-abroad-programs/exchange/index.html#list
（「神戸大学からの海外交換留学」　2023 年 11 月現在）

以下に、ドイツ語圏、フランス語圏、中国、ロシアにおける協定校一覧を示す。海外協定校のうち、学生交流細則がある大学のみ、また全学対象の交換留学のできる大学をハイライトして示す。

オーストリア・ドイツ・スイス

協定大学名	協定締結学部名等	本学関連部局
ウィーン経済大学		経営学部、経営学研究科
インスブルック大学	社会・政治学部	文学部、人文学研究科
	法学部	法学部、法学研究科
FH ヨアネウム応用科学大学		国際人間科学部、医学部、人間発達環境学研究科、保健学研究科
グラーツ医科大学		医学部
グラーツ大学	大学間協定	全学

マネジメントセンターインスブルック		法学部、工学部、法学研究科、工学研究科、科学技術イノベーション研究科
バーゼル大学	大学間協定	全学
センメルヴェイス大学アスクレピオスメディカルスクール		医学部、医学研究科
EBS University of Business and Law	Business School	経営学研究科、経営学部
オスナブリュック大学	法学部	法学研究科
キール大学	大学間協定	全学
ゲッティンゲン大学	経済学研究科	経営学部、経営学研究科
ケルン大学	経営経済社会科学部	経済学部、経済学研究科
WHU Otto Beisheim School of Management		経営学部、経営学研究科
ダルムシュタット工科大学		文、国際人間科学、理、工学部、人文学研究科、国際文化学研究科、人間発達環境学研究科、工学研究科、理学研究科、システム情報学研究科
トリーア大学	大学間協定	全学
ドレスデン工科大学	自然科学部	国際人間科学部、発達科学部、人間環境学研究科
	教師教育研究センター	人間環境学研究科
ハンブルク工科大学		工学部、工学研究科、科学技術イノベーション研究科
ハンブルク大学	人文科学部アジアアフリカ研究所	文学部、国際人間科学部、国際文化学研究科、人間発達学研究科、人文学研究科
	人文科学部（DD）*	国際文化学研究科
	法学部	法学部、法学研究科
フライブルク大学	高分子化学研究所	工学部、工学研究科
ベルリン経済法科大学		経済学部、経済学研究科、法学部、法

		学研究科
ベルリン自由大学	大学間協定	全学
	歴史・文化学学部東アジア美術学科	国際文化学研究科、国際人間科学部
マールブルク大学	経済経営学部	経済学部、経済学研究科
マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク	第一哲学部	文学部、国際人間科学部、国際文化学研究科、人文学研究科
ミュンヘン工科大学	大学間協定	全学
ライプツィヒ大学	歴史・芸術・東洋学部	国際人間科学部、国際文化学研究科

フランス・ベルギー（仏語系）

協定大学名	協定締結学部名等	本学関連部局
エクス＝マルセイユ大学	法政治学部、経済経営学部、人文学部	文学部、人文学研究科、国際人間科学部、国際文化学研究科、法学部、法学研究科、経済学部、経済学研究科
	工科学校	工学部、工学研究科、システム情報学研究科
	ポリテック・マルセイユ	理学研究科、理学部
エコール・シュペリュール・ド・コメルス・ド・パリ		経営学部、経営学研究科
ESSEC ビジネススクール		経営学研究科
グルノーブル・アルプ大学	法学院	国際協力研究科
	情報数理学部	工学部、工学研究科、システム情報学研究科
	LLASIC、外国語学部	国際文化学研究科、国際人間科学部
グルノーブル国立工科大学		工学部、工学研究科、システム情報学研究科

ケッジビジネススクール		経営学部、経営学研究科
コートダジュール天文台		理学研究科
国立応用科学院リヨン校		工学部、工学研究科、システム情報学研究科、海事科学部、海事科学研究科
トゥールーズ国立工科大学		工学部、工学研究科、システム情報学研究科
トゥール大学	法経済社会科学部、法学学際研究センター	法学部、法学研究科
パリ・シテ大学	大学間協定	全学
	地理・歴史・経済・社会科（DD）*	国際文化学研究科
	社会人文科学部(DD)*	海事科学研究科
パリ・ナンテール大学	大学間協定	全学
パリ第 2（パンテオン・アサス）大学	大学間協定	全学
フランス国立東洋言語文化学院	(DD)*	国際文化学研究科
ポワティエ大学	法学部	法学研究科
ボルドー政治学院		法学研究科
リール政治学院		法学部、法学研究科
リール大学	大学間協定	全学
リヨン高等師範学校		人文学研究科、人間発達環境学研究科、国際協力研究科
レンヌ大学	経営学院・企業経営学院	国際文化学研究科、国際人間科学部
ブリュッセル自由大学（仏語系）	文学・翻訳・コミュニケーション学部	文学部、人文学研究科、国際人間科学部、国際文化学研究科

中国

協定大学名	協定締結学部名等	本学関連部局

厦門大学	法学院	法学研究科
内蒙古医科大学	薬学院	理学研究科
華中科技大学	自動化学院	システム情報学研究科
華中師範大学	計算機学院	システム情報学研究科
華東師範大学	教育科学学院・人文学院・継続教育学院	発達科学部、国際文化学部、人間発達環境学研究科
	思勉人文高等研究院	人文学研究科
	資源与環境科学学院	発達科学部、人間発達環境学研究科
山東大学		文学部、人文学研究科
重慶大学	土木工程学院	工学部、工学研究科
	建築城規学院	工学部、工学研究科
重慶理工大学	車両工学部	システム情報学研究科
上海海事大学		海事科学部、海事科学研究科
上海交通大学	大学間協定	全学
清華大学	大学間協定	全学
浙江大学	経済学院	経済学研究科
	人文学院、伝媒と国際文化学院	国際文化学研究科、国際人間科学部、人間発達環境学研究科
	法学院	法学部、法学研究科
西安交通大学	土木学院及び建築学院	工学部、工学研究科、都市安全研究センター
汕頭大学	法学院	法学部、法学研究科
	医学院	理学研究科
大連海事大学		海事科学部、海事科学研究科
中国医科大学		医学研究科、医学部、保健学研究科、医学部保健学科
中国海洋大学	文学與新聞伝播学院	文学部、海事科学部、人文学研究科、海事科 学研究科
中央財経大学	経済学院	経済学部、経済学研究科

中央民族大学	民族学社会学学院・歴史文化学院	国際人間科学部、国際文化学研究科
中国人民大学		国際人間科学部、国際文化学研究科、法学部、法学研究科、経済学部、経済学研究科
中山大学		文学部、人文学研究科
中南財経政法大学	法学院、外国語学院	法学研究科
青島大学	化学・化学工学部	理学研究科
鄭州大学	美術系	文学部、人文学研究科
	力学及び工程科学学院、建築学院	工学部、工学研究科
同済大学	土木工程学院	工学部、工学研究科
東北大学	外国語学院	文学部、人文学研究科
	資源および土木工程学	工学部、工学研究科
南開大学	経済学院	経済学研究科
南京工業大学		工学研究科、科学技術イノベーション研究科
南京大学	大学間協定	全学
武漢大学	大学間協定	全学
	外国語言文学学院（DD）*	経済学研究科・経済学部
	汽車工程学院	システム情報学研究科
復旦大学	中国語現文学系及び歴史学系	文学部、人文学研究科
	国際関係・公共事務学院	国際協力研究科、人文学研究科、法学研究科、経済学研究科、経営学研究科、国際文化学研究科、保健学研究科、医学研究科
	国際関係・公共事務学院(DD)*	国際協力研究科
	法学院	法学部、法学研究科

北京外国語大学	北京日本学研究センター、国際関係学院、日本語学部	文学部、人文学研究科、国際人間科学部、国際文化学研究科、経済学部、経済学研究科
	北京日本学研究センター(DD)*	経済学研究科、人文学研究科
北京工業大学	城市建設学部	工学研究科
北京師範大学	教育学院、政治学與国際関係学院、外文学院	発達科学部、国際文化学部、人間発達環境学研究科
北京大学	国家発展研究院	経済学部、経済学研究科
	経済学院	経済学部、経済学研究科、経営学部
香港大学	文学院	文学部、人文学研究科、国際人間科学部、国際文化学研究科、人間発達環境学研究科
	法律学院	法学部、法学研究科
	医学院	医学部、保健学研究科
	経営経済学部	経営学部
香港中文大学	大学間協定	全学
マカオ大学	法学部	法学部、法学研究科
蘭州大学	法学院	法学研究科
（台湾）		
元智大学	工学部	工学部、工学研究科、科学技術イノベーション
国立彰化師範大学	理学院	システム情報学研究科
国立清華大学	工学院、原子科学院、電機情報学院	工学部、工学研究科、システム情報学研究科
国立成功大学	大学間協定	全学
国立政治大学	大学間協定	全学
国立台北大学		法学部、法学研究科
国立台湾海洋大学		海事科学部、海事科学研究科

国立台湾科技大学	工程学院	工学部、工学研究科、システム情報学研究科
国立台湾大学	大学間協定	全学
国立高雄大学	工学院	工学部、工学研究科
国立高雄科技大学	海事学院、海洋商務学院	海事科学部、海事科学研究科
台北医学大学	医学部	医学部、医学研究科
	看護学部	医学部、保健学研究科
高雄医学大学	医学院	医学部、医学研究科
東呉大学	法学院	法学部、法学研究科

ロシア

協定大学名	協定締結学部名等	本学関連部局
ウラル連邦大学		国際文化学部、国際人間科学部、法学部、国際文化学研究科、法学研究科
サンクトペテルブルグ大学	大学間協定	全学

*DD：ダブルディグリー協定（修士号）

上記のように、ドイツ語圏、フランス語圏、中国・台湾、ロシアと多くの交換留学先があるが、長期留学に行く学生数は決して多いとは言えない。特に中国からは受入過多で本学から派遣される学生がほとんどいないのが現状である。国際人間科学部は、カリキュラムとして短期または長期の海外留学が必修となっているため、本学からの交換留学派遣生のおよそ半数は国際人間科学部の学生となっている。

上記の交換留学のほか、全学を対象とした、短期海外研修である神戸グローバルチャレンジプログラム（神戸 GCP）もあり、ドイツ言語・文化研修（トリーア大学）コースが2023 年度に実施された。今後も短期語学研修を含んだコースの開発が期待される。

3.7 自己評価

各年度末に共通教育の担当教員は、自身の担当した授業に関して、自己評価を行い、「自己点検・評価シート」を部会長に提出する。点検項目は以下のとおりである。

① 授業科目の内容が、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっているか（6-3-2）
② 単位の実質化への配慮がなされているか（6-4-1,6-4-2）
③ 教育の目標に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学修指導法の工夫がなされてい

るか（6-4-3）

④ シラバスに、必須項目として「授業名、担当教員名、授業のテーマ、授業の到達目標、授業形態、授業の概要と計画、成績評価方法、成績評価基準、履修上の注意（関連科目情報）、事前・事後学修」及び「教科書又は参考文献」が記載されており、学生が書く授業科目の準備学修等を進めるための基本となるものとして、全項目について記入されているか（6-4-3）

⑤ 学生のニーズに応え得る学習相談の体制を整備し、助言、支援が行われているか（6-5-2）

⑥ 成績評価基準及び成績評価方針に従って、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか（6-6-1,6-6-2,6-6-3）

⑦ 学修目標に従って、適切な学修成果が得られているか（6-8-3）

3.8 全学共通教育ベストティーチャー賞

主に学部１～２年生の学生が学ぶ全学共通教育において、教育方法や内容が学生から高く評価された教員に対してベストティーチャー賞が授与される。選考対象者は全学共通授業科目を担当している本学の教員及び非常勤講師で、「全学共通授業科目(外国語科目を除く)」担当教員から３名、「外国語(第Ⅰ)科目」及び、「外国語(第Ⅱ)科目」担当教員から各１名、「オムニバス科目」から１科目が原則として選ばれる。受賞発表は前期及び後期に各１回である。平成27年度より、ベストティーチャー賞を複数回受賞した教員に対し、その顕著な教育貢献を称え「ベストティーチャー賞特別表彰」が授与されている。フランス語担当の廣田大地准教授は、令和３年度に「ベストティーチャー賞特別表彰」を受けた。
http://www.iphe.kobe-u.ac.jp/best-teacher/index.html

第３章　各言語における教育の取り組み

1. ドイツ語

1.1 授業運営体制

本学のドイツ語の授業は、２．に挙げた専任教員１１名および、非常勤講師１１名の計２２名によって行われている。専任教員のうち、２名は人文学研究科、６名は国際文化学研究科、３名は大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター配置教員であり、大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター配置教員は国際文化学研究科の大学院教育も担当している。人文学研究科配置教員は１名１年あたり３コマ（ただし 2023 年度時点では１名は２コマ、１名は３コマの計５コマ）、国際文化学研究科配置教員は４コマ、国際コミュニケーションセンター配置教員は８コマ、国際コミュニケーションセンター特任教員は 8 コマ、および国際人間科学部、文学部でのドイツ語・文学・文化に関する演習等を担当している。（１コマは２クオーター分の授業担当を意味する。）

基礎科目であるドイツ語初級Ａ１～Ａ４は文法が中心であるため、原則として専任教員が責任をもってアルファベットから接続法までの基礎的な文法を１年で終わるように配慮しながら進めている。しかしながら、それぞれの配置部局での学部・大学院講義や演習科目との兼ね合いや、非常勤講師の出講可能日の都合上、非常勤講師が初級Ａの授業を担当することもある。

新任の専任教員、非常勤講師が着任する場合には、個別に授業運営方法について事前にガイダンスを行う。また、非常勤講師との懇談会を毎年１度（６月ごろ）設け、本学におけるドイツ語をはじめとした外国語教育の現状を共有し、授業担当時や日頃気がついたことなどを述べていただいて情報交換会を行っている。

専任教員は、第１クオーター、第３クオーターのはじめに担当者会議を開き、来年度の時間割、非常勤講師の採用、その他の問題点等について協議を行っている。

1.2 教科書

使用教科書については、各担当教員が初級Ａ、初級Ｂを担当するときに最適と思われる教材をそれぞれ使用している。過去に数度、共通教材の作成についての議論がドイツ語担当者会議で起こったことがあったが、教員各自の強みを生かし、また様々な最先端の教材に触れたり、教材開発を行ったりすることができるようにということを重視し、自由度を高くしている。多くの非常勤講師がベテランであり、他大学での教授経験を活かして教えられること、また若手の非常勤講師にとっても、自分で用意した教材を工夫することもできるため、この方針は好意的に受け止められている。ただし、第三外国語科目では、さまざまな学部からの学生が集まることを想定し、共通の教科書（上野成利・本田雅也「パノラマ 初級ドイツ語ゼミナール［第三版］」白水社）を用いている。2023 年度の使用教科書一覧は巻末資料に示す。2023 年度の使用教科書一覧は次の URL の通り。（巻末補足資料も参照）

http://www.iphe.kobe-u.ac.jp/zengaku_textbook/german/2023textbook_Germany.pdf

1.3 特色ある教育の試み

ドイツ語の担当教員は、それぞれの専門分野や興味を活かし、国際コミュニケーションセンター配置教員を中心に、特色のある教育の試みが行われている。以下に例を挙げる。

・「ドイツ語 SA・SB」（担当：安田麗）
　協定校であるグラーツ大学の学生とのオンライン交流を１クオーターに１、２回ほど実施し、ドイツ語圏から神戸大学に留学中の学生にも授業参加してもらうなど、ドイツ語を実際に使用することで運用能力を伸ばす。

・「外国語セミナー（ドイツ語）A・B」（担当：芹澤円）
　通常の授業に加え、神戸市にあるドイツと縁の深い企業（2022 年度はシスメックス）への訪問、日独での産業協力などに関してのお話を伺うことで、自分の身近にもドイツとの接点があることを実感してもらう。

・「ドイツ語初級Ａ１～Ａ４」（担当：林良子）
　反転授業を行い、動画教材で事前に文法事項を予習してもらい、授業の場では文法補足説明と、文法項目を用いた表現練習に時間を取る試みを行っている。

　また、海外におけるドイツ語語学研修を、全学を対象とした神戸グローバルチャレンジプログラム（神戸 GCP）として企画し、協定校であるトリーア大学の夏季語学講習への参加を促している。2023 年度は 4 名の参加があった。

ドイツ言語文化プログラム（ドイツ言語文化）【国際コミュニケーションセンター】
【コース実施期間】2023/5/15～2023/9/29
【うち派遣期間（海外）】2023/8/7～2023/9/2（27 日間）
【コースの概要】トリーア大学のドイツ語サマーコース参加の機会を利用し、ドイツ語能力を向上させると同時に「多文化理解」をテーマにした学生企画型の海外学修プログラムを実施します。参加者は、語学授業以外の時間を使って、自身の関心に即したヨーロッパの多様な文化理解を深める活動を企画します。担当教員による指導助言を受けつつ、他の参加者と協働しながら事前学修・派遣先での学修・事後学修を進めます。
http://www.iphe.kobe-u.ac.jp/kobe-gcp/course/course.html
（神戸グローバルチャレンジプログラム HP より：2024 年 1 月 4 日閲覧）

1.4 授業運営上の問題点
　ドイツ語の教員間での情報共有は円滑であり、運営上の大きな問題点はないが、以下にいくつか懸念事項を挙げる。
1)　非常勤講師の手配
　ドイツ語の専任教員数は、4 言語のうち最も多いものの、役職、サバティカル、休業等で、非常勤講師を急遽増員する際、あらかじめ設定されている時間割に割り当て可能な非常勤講師が少なく、調整が困難となることもある。非常勤講師採用の際には、公募は行わず、専任教員を通じて推薦を行い、担当者会議で決定する。推薦条件として、博士号取得者または取得見込み者、および修士号取得後、大学でのドイツ語教授経験を有する者となっており、該当者がすぐに見つからないことがある。

2)　ネイティブスピーカー教員の少なさ
　現在、専任、非常勤教員を含め、２名だけがドイツ語母語話者である。より高度なドイツ語運用、特に外国語セミナーの実施にあたっては、ドイツ語母語話者の教員の増加が望

まれる。

3) 再履修学生の扱い

他の未修外国語にも共通する課題であるが、試験に不合格となった学生は、次年度の同じ授業の単位を履修しなければならない。例えば初級Ａ４だけに不合格となった学生は、次年度の第４クオーターのみ再履修をするため、前提となる文法知識などを忘れていることが多く、再履修学生の試験合格が困難となる場合が見られる。また、２年次よりキャンパスが異なる医学部、海事科学部の学生は、必修外国語の８つの授業の１つでも落とすと留年となる。そのため、これらの学部の学生のみを対象とした再試験制度がある。再試験受験の要件は、試験において 50 点以上 60 点未満の成績を取った場合、担当教員が申請することによって認められる。ドイツ語は特に、医学部の学習者が多く、毎年不合格となった学生から単位を認めてほしいという要望が教員に寄せられる。再履修学生を対象としたオンデマンドコースの開設などが将来的に望まれるが、オンデマンドコースを誰が担当し、どのような教材を作成し、評価するかなど問題点が多く、今の所実施に至ってはいない。

4) 海外語学研修の減少

ドイツ語の海外語学研修として、コロナ禍前までは、ハンブルク大学の夏季語学研修、グラーツ大学の夏季語学研修への参加をドイツ語の授業を通じて呼びかけ、年間５～２０名の学生が海外でドイツ語研修を受けていた。コロナ後に、ハンブルク大学のサマースクールが廃止になったこと、グラーツ大学の語学研修担当者や本学専任スタッフが入れ替わったことなどから、両大学への短期研修プログラム派遣は中止となった。2023 年にはその代わりにトリーア大学への短期研修を新規に立ち上げることができたが、今後はさらなる短期留学の機会の提供が必要であると考えられる。

2. フランス語

2.1 授業運営体制

本学におけるフランス語の授業は、２. に挙げた専任教員７名および、非常勤講師１３名の計２０名によって担われている。専任教員のうち、２名は人文学研究科（うち１名は本年度後期着任)、４名は国際文化学研究科、１名は大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター配置教員であり、国際コミュニケーションセンター配置教員は国際文化学研究科の大学院教育も担当している。人文学研究科配置教員は１名１年あたり３コマ（ただし 2023 年度時点では１名は２コマ、１名は３コマの計５コマ)、国際文化学研究科配置教員は４コマ、国際コミュニケーションセンター配置教員は８コマ、国際コミュニケーションセンター特任教員（本年度は欠員）は９コマを担当している。（１コマは２クオーター分の授業担当を意味する。）

フランス語初級Ａ１～Ａ４は文法が中心となる授業のため、原則として専任教員が責任をもってアルファベから接続法現在・過去までの基礎的な文法事項を１年間で終えるように配慮しながら進めている。とはいえ、配置部局での学部・大学院の講義や演習との兼ね合いや、非常勤講師の出講可能日・時限の都合上、専任教員が初級Ｂを、非常勤講師が初級Ａの授業を担当することもある。

専任教員・非常勤講師が新たに着任する場合には、個別に授業運営方法などについて事前にガイダンスを実施している。また、非常勤講師との懇談会を毎年２回（それぞれ第１

クォーターと第３クォーター初め頃）設け、本学におけるフランス語をはじめとした外国語教育の現状を共有し、担当授業Ａ・Ｂの連携や授業実施において気になった点・気がついたことなどの情報交換を行っている。

専任教員はメールでのやり取りに加え、適宜、担当者会議を開き、様々な連絡事項の伝達、来年度の時間割、非常勤講師の採用、その他の問題点等について協議している。

2.2 教科書

使用教科書については、各教員が初級Ａや初級Ｂを担当する際に最適と思われる教材をそれぞれ選んで使用している。授業の質保証などの観点から共通教材作成の意義が議論されることもあったが、何よりも教員各自の強みと個性を生かすこと、また最先端の教授法に触れること、魅力的な教材を探したり、新しい教材を開発したりできるようにしておくことなど、自由度を高くしている。授業は教材を工夫する機会にもなるため、この方針は好意的に受け止められており、実際、自らの経験を生かした教科書を作成した教員もいる。長年にわたり神戸大学のフランス語を担ってきたベテランの非常勤講師とともに、近年は博士号を取得したばかりの若手、またネイティヴの非常勤を積極的に採用しているため、最新の教授法による様々な創意工夫がなされている。それゆえ、各クォーター毎の試験問題も各教員が独自に作成している。2023 年度の使用教科書一覧は次の URL の通り。（巻末補足資料も参照）

http://www.iphe.kobe-u.ac.jp/zengaku_textbook/french/2023kouki_textbook_French.pdf

2.3 特色ある教育の試み

初級クラス

初級Ａに関しては、教科書だけでなく、詳しい説明を付したプリントを配布したり、小テストなどで学生の理解度を確認しながら授業を進めるとともに、フランス語圏における文化や社会を紹介するなど、学生の異文化への関心と理解を促すようつねに努力している。その際、パワーポイントや BEEF plus などを用いて視覚情報も提供することもある。

幾つかのクラスにおいては、フランス語の語彙習得のための Web サイトを活用して、モチベーションの向上と語彙力の向上とを図っている。

コミュニケーションを中心とする初級Ｂのクラスではグループワークを実施するクラスが多い。なかには席替えを毎回行い、ペアワークの際に相手が変わるよう、性別が偏らないよう配慮して、学生のモチベーションを上げる工夫をしている場合もある。また、フランスのニュースや音楽・映画などを紹介し、語学を通してフランス語圏の国々に対する関心を高めようとしている。

S クラス

１年次後期から履修可能なインテンシブ･クラスであり、フランス語学習に意欲のある学生たちが集まり、効果的な授業が展開されている。教員自身が作成した文法解説動画を用いることで、反転授業形式とし、従来の授業では授業時間の大半を教師による文法解説に費やしていたのに対して、S クラスでは授業時間の大部分を、ペアワークや練習問題に使うことができている。また、期末試験対策にも、解説動画を繰り返し見ることができるため、学習効果を大いに高めている。また、希望者を対象に週一回の読書会を開催したり、授業以外にもフランス語学習のための様々な活動も行っている。

中・上級クラス

幾つかの授業では、フランス語圏からの留学生にゲスト参加してもらうことで、学習者は実際にネイティブとフランス語で会話する機会を持つことができている。また、それによりフランス語学習意欲を高めることにもつながっている。授業と連動して、学習者がフランス語圏からの留学生と日仏タンデム（語学交換）のペアを組めるように、授業内でタンデム学習について解説したり、希望者を募ったりしている。

また、フランス語圏という枠組みによって、フランスだけに限らず、世界のその他のフランス語圏の歴史や社会、民族問題、芸術などにも関心を向けるように工夫されている。この点は特に、初級文法を改めて復習しながら、時事問題や様々な人物を巡って書かれたテクストを購読する授業によって、しっかり進められている。

授業以外でも、フランス語プレゼンテーション大会を開催したり、フランス語夏季特別セミナーを実施したりしている。これらの試みをまとめた神戸大学フランス語学習サイトの URL は次の通り。http://www.iphe.kobe-u.ac.jp/solac/france/index.html

2.4 授業運営上の問題点

フランス語教員の間では情報の共有が円滑になされており、運営上の大きな問題点は見当たらない。しかしながら、以下に懸念される事項を 4 点挙げておく。

1) 非常勤講師の手配

フランス語の専任教員が役職、サバティカル、休業等で、非常勤講師を急遽増員しなければならなくなった場合、あらかじめ設定されている時間割で担当可能な非常勤講師を探すことに手間取り、調整が困難になるときもある。さらに、非常勤講師採用は公募ではなく、専任教員が適任者の推薦を行い、必要ならば面接を経て、担当者会議で最終決定している。推薦には、1. 博士号取得者または取得見込みの若手（40 歳代まで）、2. フランス語圏への留学経験有りという条件を課しているため、やはり適任者がすぐには見つからないことがある。また、博士号取得の若手を積極的に採用していることもあり、専任が決まって授業開始間際に担当を辞退するケースが増えている。専任採用は喜ばしいことながら、頻繁な新規雇用は業務を増やすことになるだけでなく、優れた非常勤講師の確保も課題である。関係学会などで目ぼしい若手を探すようにしてはいるが、年々難しくなってきているように思う。

2) ネイティブスピーカー教員の少なさ

2022 年度以降、学内事情のため、専任のネイティヴ教員が国際コミュニケーションセンターに配置されていない（2024 年 4 月に着任予定）。そのため、今年度は 2 名のフランス語を母語とする非常勤教員を雇用したが、適任者を見つけることはやはり難しいのが現状である。しかしながら、より高度なフランス語の運用、特に外国語セミナーの実施にあたっては、ネイティヴ教員の増加が強く望まれる。

3) モチベーションの低下

他の未修外国語にも共通する課題だが、クォーター毎の成績評価で不可となった学生は、次年度に同じ授業の単位を履修しなければならない。例えば初級Ａ 4 だけを落とした学生は、次年度の第 4 クオーターで再履修することになる。それゆえ、前提となる文法知

識などを忘れていることが多く、再履修学生の単位取得が難しくなっている場合が見られる。また、全国的に大学において第二外国語を学ぶことに対する意義が見失われ、学生の意欲にも悪影響が出ているようにも感じる。

4) 海外語学研修の減少

フランス語の海外語学研修としては、2015 年度まで、毎年９月にリヨン・カトリック大学附属語学学校で一ヶ月の夏季語学研修が実施されていたが、参加希望者の減少や社会情勢の不安定化により 2016 年以降は残念ながら行われていない。また、コロナ禍前までは、交換留学制度を利用して、フランスやベルギーの大学に留学する学生が一定数いたが、Covid-19 により海外留学の機会が奪われたことは大きな痛手であった。神戸 GCP（神戸グローバル・チャレンジ・プログラム）には今のところフランス語の海外語学研究のプログラムがなく、今後は、教員の負担や学生のニーズなども考慮しつつ、学生に対して短中期の留学機会を提供していく必要があると考える。

3. 中国語

3.1 授業運営体制

本学の中国語の授業は２．に挙げた専任教員５名、人文学研究科の特任教員１名（外国語第Ⅱ部会には未所属）および、非常勤講師２７名の計３３名によって行われている。専任教員のうち、３名は国際文化学研究科、２名は大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター配置教員であり、大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター配置教員は国際文化学研究科の大学院教育にも担当している。国際文化学研究科配置教員は４コマ、国際コミュニケーションセンター配置教員は８コマ、人文科学研究科特任教員は５コマを担当している。（１コマは２クオーター分の授業担当を意味する。）

中国語初級Ａ１～Ａ４は会話表現、中国語初級Ｂ１～Ｂ４は文法と読解を中心としているが、履修者の絶対数が多いのに対して専任教員の数は限られているため非常勤講師の担当コマ数が多い。このような状況でも同一科目の教育の質と内容にバラツキが出ないように幹事が中心となって非常勤講師に対して教育面での意見交換やアドバイスを念入りに行っている。また、新任の非常勤講師が着任する場合には個別に授業運営方法についてアドバイスを行い、必要に応じて専任教員の授業見学なども行っている。

専任教員は年度の初めと終わりに担当者会議を開き、来年度の時間割、非常勤講師の採用、その他の問題点等について協議を行っている。

3.2 教科書

1 年次の必修クラスである中国語初級 A1～A4、B1～B4 では科目ごとに教科書を統一している（A1, A2：朱春躍・中川正之『はじめての中国語　発音・入門編』（白帝社）、A3, A4：朱春躍・中川正之『はじめての中国語　基礎文法編』（白帝社）、B1, B2：王柯・馮誼光・石原享一『新版　とっさのひとことで学ぶ中国語　初級編』（光生館）、B3, B4：馮誼光・王柯・石原享一『グループ方式で学ぶ中国語中級編 — 日本と中国［改訂新版］』（東方書店））。進度に関しては専任教員と非常勤講師の間で大まかな指標を共有しているが、近年は博士号を取得したばかりの若手の非常勤講師が増えていることを鑑みて各自の教員による創意工夫（IT やレアリアを用いた教育など）を積極的に奨励している。また、期末試験は統一問題ではなく教員ごとに作成を依頼しているが、これも各教員による教育の特色

を反映させやすくするためである。

3.3 特色ある教育の試み

中国語インテンシブコースおよび「外国語セミナー」中級以上の科目においては、国際コミュニケーションセンター配置教員を中心に、特色のある教育の試みが行われている。以下に例を挙げる。また、課外でも学生向けのセミナー活動を例年行っている。

・「中国語語 SA３, SB３」（髙橋康徳がＳＡ担当・陳暁がＳＢ担当）は 20 名定員の少人数インテンシブクラスであり、参加学生一人一人に費やす時間を十分に確保することで充実した教育を提供している。近年、このクラスには中国にルーツのある学生や中華学校で学んだ学生の参加も多く、初習クラスではカバーできないような中級レベルの解説を行う機会を設けたり、学生間での相互学習を促すような工夫を行っている。

・「外国語セミナー（中国語）Ａ・Ｂ」（担当：髙橋康徳）では「中国語を作業言語にして広東語を学ぶ」というユニークな授業を行っている。広東語は香港や広東省ではメジャーに使われる中国語方言であり世界各国のチャイナタウンでも使用頻度が高い。中国語を作業言語にすることで２言語の習得を同時に進める複言語的な教育を目指している。

・国際コミュニケーションセンターでは課外のセミナーを例年行っており、2023 年度は「中国語検定試験リスニングセミナー」を 2024 年 2 月 13, 14 日に行った。このセミナーでは１年次を対象とした初級編（中国語検定４級レベル）だけではなく２年次以降や中国にルーツを持つ学生を対象にした中級編（HSK ４, ５級レベル）も開講した。
http://www.iphe.kobe-u.ac.jp/solac/news/2024_0111_ch.html
（国際コミュニケーションセンターHP より：2024 年 2 月 14 日閲覧）

3.4 授業運営上の問題点

中国語の教員間で共有されている問題点としては、以下の３点が挙げられる。

1) 非常勤講師が担当するコマが多いこと

例年、中国語の履修者は未修外国語４言語の中で最も多く 2024 年度では１年次学生の 45%強を占める（全体 2587 名のうち 1191 名：46.0%）。一方、専任教員は特任を含めても６名しかおらず、1 年次必修クラスに限ると非常勤講師が担当するクラスが 90%を越える（144 クラスのうち 130 クラス：90.2%）。非常勤講師の比率がここまで高くなると神戸大学全体での中国語教育の質を維持するために煩雑な連絡作業や個々の講師との意見交換を繰り返す必要があり、専任教員にかかる負担は大きい。また、時間割を作成する際にも非常勤講師の入れ替えや新規採用のための業務量が膨大になってしまっている。

2) 中国語既習者に対する対応

近年、高校などで中国語を学んだ経験がある学生に加えて、中国にルーツを持つ学生や各地の中華学校で学んできた学生が増えてきている。これらの学生にとっては 1 年次必修の初級レベルのクラスは内容が簡単すぎるため、授業への集中力が欠けてしまいアクティブラーニングに協力的ではない状況も見受けられる。また、中国にルーツを持つ学生などは自然習得に近い形で中国語を習得したため、発音記号であるピンインや標準語と方言の違いを把握できていないことも多い。1 年次後期に開講されるインテンシブクラスである

中国語初級 SA, SB ではこのような学生への対応も可能なのだが、前期にはインテンシブクラスには開講されていないため既習学生のレベルに合った中国語教育が提供できていない。今後より柔軟なクラス設計を行うことが望まれる。

3) 海外語学研修の減少

コロナ禍以降は中国入国に際しては一律にビザを取得する必要があるが日中関係の状況変化によってビザ手続きの難易度が変動しやすい。また、中国国内での政治的要因などのため現地の大学との交流や短期研修の受け入れには消極的なムードが漂っている。そのため、海外語学研修の企画自体が難しくなっている。

4. ロシア語

4.1 授業運営体制

本学のロシア語の授業は、２．に挙げた専任教員１名および、非常勤講師６名（2023 年度時点）の計７名によって行われている。専任教員は国際文化学研究科に配置されており、１年あたり 4 コマを担当している。（１コマは２クオーター分の授業担当を意味する。）

初級クラスではＡクラス、Ｂクラスを通して選任と非常勤の担当者全員が共通教科書を使用している。スラブ語に属するロシア語は文字や文法が英語と大きく異なり、覚えなければならない文法項目も多い。同じテキストを使うことによって、Ａで文法事項を中心に学習し、Ｂで学習済みの文法事項を確認・復習しつつ会話や発声の実践的練習に取り組むという神戸大学の外国語学習の基本構造をより効果的に実践しつつ、学生の理解の定着を高めるようにしている。初級ＡとＢで同一クラスを受け持つ担当間で毎週の授業後に進捗報告を行い、テスト期間前には難解な文法事項の復習を全クラスで実施するなどの工夫も併せて行っている。すべてのクラスで教科書を統一する試みは 2016 年頃からすでに行われてきたのであり、この方針で一定の手ごたえが得られているものと思われる。

また、毎年新学期の開始を控えた３月に専任・非常勤の全初級クラス授業担当者が集まってミーティングを行い、昨年度の反省点と新年度の共通教科書の進行スケジュールを共有することで、部会のチームワークを緊密にするよう努めている。

新任の非常勤講師が着任する場合には、個別に授業運営方法について事前にガイダンスを行っている。

4.2 教科書

使用している教科書は青島陽子・シュラトフ・ヤロスラブ・中野悠希『ロシア語の世界へ！：初心者の旅』（朝日出版社）である。日常的で自然な表現を積極的に取り入れた例文や、いわゆる「文法」と「会話」の内容が分断されることなく相互補完的に関係するような項目分類が特徴である。その分、文法事項の体系的説明がやや弱く、各担当者がクラスの力量に応じて補足説明をしばしば行う必要がある。この点については近年中に本書の改定版が刊行される際には現場の声を伝え、改善を図る予定である。

4.3 特色ある教育の試み

ロシア語にはネイティヴの専任教員がいないため、初級Ｂクラスではアニメーションや音楽動画の視聴などを積極的に取り入れ、ロシア語と日本語を交えた文化紹介を行うことで、日本の日常から遠いロシア語世界を身近に感じてもらう工夫をしている。また今年度

は、ネイティヴの神戸大学院生を TA として雇用し、発音や会話のトレーニングに継続的に協力してもらうことも試みた。

１年次最後に、２年次以降に選択できる授業や履修体系について紹介し、継続的学習を促すようにしている。

２年次のクラスではロシア語ネイティヴに非常勤講師が授業を担当することで、ロシア語の音や表現の感覚にさらなる興味を持たせるようにしている。３年次以降の授業では読みやすい長文を読解したり、検定の練習問題を扱ったりして、語彙力や読解力に一層磨きをかけるとことを目指している。同時に、少人数の体制を生かして受講者の個別的要望にも可能な範囲で対応を心がけている。

在大阪ロシア領事館の協力で、12 月に開催される「ロシア語の夕べ」に有志の参加者を募り、同会で学生が詩や簡単な文章の朗読を行うためのサポートをしている。ここ数年はコロナ禍のために催し自体が停止していたのだが、人前での朗読発表や他大学でロシア語を学習している学生との交流は学習意欲の向上にもつながるため、今後は再びこうした方面にも注力していく予定でいる。

4.4 授業運営上の問題点

以下にロシア語授業を運営する上でいくつか懸念となる事項を挙げる。

1) ロシア語学習者の減少

2022 年にロシア軍によるウクライナ侵攻が開始した直後、ロシア語を第一志望とする履修者が例年の５割程度に大きく数を減らした。入学前の当該言語に一切触れない状態で履修の希望を確定する本学のシステムの都合上致し方ない面もあったが、ロシア語学習者の数は 2023 年度時点でも目立った回復を果たしてはいない。ただし見方を変えれば尚一定の学生がロシア語を学ぶことを積極的に選択しているということでもあるから、学生のニーズや動機を適切に捉え、丁寧な指導を行うことによって、単なる数の回復ではないロシア語学習者の質的向上を図ることが重要であると捉えている。

また、この点に関した別の試みとして、ロシア語履修者の減少に伴い浮いた形となった非常勤講師雇用枠を活用し高度教養科目である「多言語セミナー：ウクライナ語」を 2023 年度より新規開講するに至った。この科目はロシア語の前提知識を要求するものではないが、ウクライナ語とロシア語とには似通った点もあり、初級でロシア語を選択した学生が二年次以降にウクライナ語に触れることは十分考えられる。こうした試みを通じて英語とは大きく異なるスラブ語世界の広がりを学生に感じてもらうことも、長期的に見て必要である。

2) ネイティブスピーカー教員の少なさ

現在、非常勤講師 1 名だけがロシア語母語話者である。そのため、初級の学習者でネイティブスピーカーの発音に触れ会話練習をすることのできる学生は１クラスのみと限られてしまい、不公平が生じかねない。より高度なロシア語運用、特に外国語セミナーの実施にあたっては、ロシア語母語話者の教員の増加が望まれる。

3) 海外語学研修の減少

ウクライナ侵攻以前には、モスクワの大学での夏季語学研修や、エカテリンブルグの大学との合同セミナーを行い、年間１０人弱の学生がロシア語での海外語学研修に参加して

いた。現在はロシア国内に赴くこと自体が困難な状況であるため、こうした研修やセミナーは停止し再開のめどが立たないのが現状である。ロシア本国ではなくとも、ロシア語を活かせる海外語学研修を提供するべく活路を模索していく必要がある。

第４章「外部評価の項目モデル」に沿った自己点検 ・評価

本章では、平成 30 年に神戸大学評価・FD 専門委員会にて決定され、国際教養教育委員会にて報告された「自己点検・評価および外部評価の評価項目モデル」に沿って、自己点検・評価を行う。(　　) 内にある「領域」は、大学改革支援・学位授与機構により平成 16 年に決定され、令和 2 年に改訂された「大学評価基準」にある 6 つの領域を指す。

1. 自己点検・評価及び外部評価の評価項目モデル

以下、p.39 に示す「自己点検・評価および外部評価の評価項目モデル」に沿って自己点検・評価を行う。

A 当該教育部会の組織構成と運営体制（「領域 1 教育研究上の基本組織に関する基準」に対応） A －①：基本的な組織構成が適切であり、実施体制・運営体制が適切に整備され、機能しているか

第 2 章で述べたように、外国語第 II 部会には 4 言語の担当教員が所属しているが、言語ごとに専任教員の数が大きく異なる。ドイツ語は 11 名、フランス語は 7 名（ただし特任教員が 2023 年度は不在)、中国語は 5 名、ロシア語は 1 名である。どの言語の専任教員も、非常勤講師を含め、専門分野は語学、文学、政治学、思想研究、芸術学と多岐に渡り、各自の専門分野を生かしつつ、外国語授業の運営にあたることができている。

しかしながら、ドイツ語およびフランス語においては、専任教員の人数的にも役割を分担し、様々な問題点に容易に対応できる体制となっているが、中国語、ロシア語は非常勤講師率が極めて高いため、教員間の連携が難しい場合もある。そのため、教材やガイダンスなどで補うことにより、効果的な授業運営を進めることができている。

未修外国語担当の専任教員は、国際文化学研究科、人文学研究科、大学教育推進機構国際コミュニケーションセンターの 3 部局にそれぞれ配置されているため、採用人事は各部局の内で行われ、中国語、ロシア語担当の専任教員を増員することは難しいのが現状である。

運営面では、部会長と幹事からなる幹事会では、密に連絡をとりあいながら各種議案に対処することができており、幹事から各言語担当教員への連絡も円滑に行われている。年に 1 度の外国語第 II 部会の総会を開き、さまざまな問題点の共有や議論が言語を超えて十分にできている。

B 当該教育部会の内部質保証（「領域２ 内部質保障に関する基準」に対応）
B －①：自己点検・評価によって確認された問題点を改善するための対応措置を講じ、計画された取組が成果をあげている、又は計画された取組の進捗が確認されている、あるいは、取組の計画に着手していることが確認されているか
B －②：学生を含む関係者等からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組を組織的に行っているか
B －③：授業の内容及び方法の改善を図るためのＦＤを組織的に実施しているか
B －④：教育活動を展開するために必要な教育支援者や教育補助者が配置され、適切に活用されるとともに、それらの者が担当する業務に応じて、研修の実施など必要な質の維持、向上を図る取組を組織的に実施しているか

Ｂ－①　教員間の情報共有という点において、現在の幹事会はよく機能していると言える。４言語各言語において、教務担当、非常勤担当、図書担当、HP 担当などを分担することができ、円滑に業務が行えるよう、また部会長、また幹事の業務過多にならないような工夫がされている。

例えば、ドイツ語担当教員においては、部会長が幹事を兼ねる場合には、幹事補佐の教員を１名指名することができるようになっている。また、教務担当教員２名が、非常勤への連絡、時間割作成、次年度非常勤要求申請書類の作成、来年度教科書一覧の作成などを行う。２名は２年任期であるが２名が同時に退任しないよう、１年ずつ担当開始をずらしている。その他、HP や図書選定委員１名をおいている。

Ｂ－②③④　第２章 3.5 に述べた授業評価アンケートにより、学生からの授業へのフィードバックは毎クオーターごとに得られている。これらのアンケートにはコメントを教員から記入する部分もあり、自身の授業評価を見直す機会が与えられている。

大学教育推進機構では、全学共通授業においてピアレビューを行っており、外国語第 II 部会からは 2022 年 11 月 16 日に、「外国語セミナーA（フランス語）」（担当：廣田大地准教授）が対象科目となった。その他、国際コミュニケーションセンターにおいても、「外国語教育セミナー」として毎年、外国語教育ピアレビューが行われ、外国語第 II 部会に所属する教員の授業報告が行われている。2023 年度は 12 月 1 日に行われ、ドイツ語の Christopher Schelletter 特任助教により、「国際人間科学部におけるドイツ語上級ライティングの授業」の紹介が行われた。

https://solac-contents.blogspot.com/2023/11/2023121-2023.html
（2024 年 1 月 4 日閲覧）

以上のような観点から、学生を含む関係者等からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組みや、ピアレビューといった FD の実施、国際コミュニケーションセンターが外国語教育・外国語教育研究全体への支援を行う形となっており、必要な質の維持、向上を図る取組を組織的に実施していると言える。

C 当該教育部会の教育課程と学習成果（「領域６ 教育課程と学習成果に関する基準」に対応）
C －①：当該教育部会が提供する授業の目標が、全学共通授業科目の区分ごとの学修目標に対応したものとなっているか
C －②：授業担当者に共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされているか
C －③：授業科目の内容が、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっているか
C －④：単位の実質化への配慮がなされているか
C －⑤：教育の目標に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学修指導法の工夫がなされているか
C －⑥：シラバスに、必須項目として「授業名、担当教員名、授業のテーマ、授業の到達目標、授業形態、授業の概要と計画、成績評価方法、成績評価基準、履修上の注意（関連科目情報）、事前･事後学修」及び「教科書又は参考文献」が記載されており、学生が書く授業科目の準備学修等を進めるための基本となるものとして、全項目について記入されているか
C －⑦：学生のニーズに応え得る履修指導の体制を組織として整備し、指導、助言が行われているか
C －⑧：学生のニーズに応え得る学習相談の体制を整備し、助言、支援が行われているか
C －⑨：成績評価基準及び成績評価方針に従って、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか
C －⑩：学修目標に従って、適切な学修成果が得られているか

C―①②③　第２章に挙げた外国語第 II の学修目標と、実際の授業運営形態（初年次に初級レベル 0,5 単位授業 A/B をそれぞれ４つずつ、年間８科目履修、２年次以降に中級及び外国語セミナーを選択）及び、3.2 に挙げた共通シラバスにおける「授業のテーマ」及び「授業の到達目標」と合致している。各言語の全授業担当者が共通シラバスを用いていることで、共通の到達目標が設定されている。

C―④　単位の実質化への配慮については、第２章 3.7 に挙げた各教員への「自己点検・評価シート」の項目にも含まれており、各教員はその根拠資料（シラバス、ポートフォリオ、毎回の小テスト等）を記入することになっている。また、学生を対象とした振り返りアンケートについても、当該授業の自己学修時間を尋ねる項目があり、学生自身でも実際の学習の様子について常に振り返る機会がある。このような取り組みにより、単位の実質化に配慮がなされていると考えられる。

C―⑤ 未修外国語においては、１年次初級Ａ/Ｂ、２年次以降、中級そして外国語セミナーといずれの学習者においても文法/表現/文化をバランスよく学ぶことのできるカリキュラムとなっている。

C―⑥ 巻末資料にシラバスの記載例を掲載する。そこにあるように、全項目について明記できるフォーマットがあり、それが実行されている。

C—⑦⑧⑨ 学生の振り返りアンケートを参考にし、授業の見直しや新たな工夫をしながら、指導体制をひくことができている。また、成績基準についても、教員間での情報共有ができており、チェック体制もとられている。

参考資料 1

自己点検・評価及び外部評価の評価項目モデル

平成 30 年 6 月 14 日 評価・FD 専門委員会決定
平成 30 年 6 月 28 日 国際教養教育委員会報告

A　当該教育部会の組織構成と運営体制（「領域 1　教育研究上の基本組織に関する基準」に対応）

A－①：基本的な組織構成が適切であり、実施体制・運営体制が適切に整備され、機能しているか（1-1-1）

B　当該教育部会の内部質保証（「領域 2　内部質保障に関する基準」に対応）

B－①：自己点検・評価によって確認された問題点を改善するための対応措置を講じ、計画された取組が成果をあげている、又は計画された取組の進捗が確認されている、あるいは、取組の計画に着手していることが確認されているか（2-3-1）

B－②：学生を含む関係者等からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組を組織的に行っているか（2-3-3）

B－③：授業の内容及び方法の改善を図るためのＦＤを組織的に実施しているか（2-5-4）

B－④：教育活動を展開するために必要な教育支援者や教育補助者が配置され、適切に活用されるとともに、それらの者が担当する業務に応じて、研修の実施など必要な質の維持、向上を図る取組を組織的に実施しているか（2-5-5, 2-5-6）

C　当該教育部会の教育課程と学習成果（「領域 6　教育課程と学習成果に関する基準」に対応）

C－①：当該教育部会が提供する授業の目標が、全学共通授業科目の区分ごとの学修目標に対応したものとなっているか（6-2-1）

C－②：授業担当者に共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされているか（6-2-1）

C－③：授業科目の内容が、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっているか（6-3-2）

C－④：単位の実質化への配慮がなされているか（6-4-1, 6-4-2）

C－⑤：教育の目標に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学修指導法の工夫がなされているか（6-4-3）

C－⑥：シラバスに、必須項目として「授業名、担当教員名、授業のテーマ、授業の到達目標、授業形態、授業の概要と計画、成績評価方法、成績評価基準、履修上の注意（関連科目情報）、事前･事後学修」及び「教科書又は参考文献」が記載されており、学生が書く授業科目の準備学修等を進めるための基本となるものとして、全項目について記入されているか（6-4-3）

C－⑦：学生のニーズに応え得る履修指導の体制を組織として整備し、指導、助言が行われているか（6-5-1）

C－⑧：学生のニーズに応え得る学習相談の体制を整備し、助言、支援が行われているか（6-5-2）

C－⑨：成績評価基準及び成績評価方針に従って、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか（6-6-1, 6-6-2, 6-6-3）

C－⑩：学修目標に従って、適切な学修成果が得られているか（6-8-3）

※このモデルは、平成 31 年度以降に実施する外部評価において適用する。

第５章　１巡目の外部評価結果を受けての自己点検・評価

本章では、2016 年 3 月に発行された大学教育推進機構　国際教養教育院　外国語部門外国語第 II 教育部会「外部評価報告書」の第４部　外部評価報告書の内容に関する自己点検・評価を行う。

1.　１巡目の外部評価結果およびそこで明らかとなった当該部会の課題等

まず、2016 年 3 月の外部評価委員会にて指摘された改善点、提案等を以下に列挙し、順に 1)～4)と番号を付す。

外部評価報告書（１）大阪府立大学　細見和之教授（当時）の意見
○ 特に改善を要する点：なし

外部評価報告書（２）芦屋大学　伊川徹　名誉教授（当時）の意見
○ 特に改善を要する点：
1)「外国語学習にほとんど期待を寄せていない学生諸君に対して、現状のさまざまな施策が説得力を持って提供されているかどうかの検証が必要である」
2)「現状ではコミュニケーション能力の養成が前面に出過ぎており、外国語第 II 設置の第一義的根拠である言語文化修得の側面が強調されていない。」
3) 近未来改革として外国語を含む共通共通教育科目を 1 年次と 2 年次に並列水平配当せず、１年次から 4 年次まで縦列垂直配当してはどうか？

外部評価報告書（３）京都大学　中村唯史教授（当時）の意見
○ 特に改善を要する点：
4)「関係部局間の協力と連携の不足」①国際文化学部、国際コミュニケーションセンター、文系学部の英語以外の外国語・外国文化・国際社会等を専門とする部局との連携、②留学業務を担当する組織および教員間の連携

2.　課題等に対する、当該部会の取り組み・改善への自己点検・評価

上記 1)の指摘に関しては、未修外国語に限らず、すべての外国語の授業運営に共通することであるが、ベストティーチャー特別賞を授与されたフランス語担当廣田大地准教授をはじめ、本評価資料にあるように、各言語担当教員が工夫を凝らし、特色ある教育の実践を進めている。学生へは毎クオーターごとに、授業振り返りアンケート（匿名）を行ってもらい、そこから各教員は授業のフィードバックがもらえることから、より効果的な授業運営ができる仕組みとなっている。

2016 年時点では、前年度の各言語のクラス数を目安に次年度のクラス数を決定し、11 月の時間割確定時までに非常勤講師の手配を行っていたが、社会情勢の変動により希望者数に大きな変動がみられ、4 月に急遽クラス数を増やし、非常勤講師に依頼し直すケースが続いていた。これがうまくいかない場合には、クラスサイズが 50 名を超えることも起こり、授業運営の問題点となっていたが、2018 年度からは入学時に事前希望調査を行い、希望調査結果によってあらかじめ決められたクラスに振り分ける形式に変更され、クラスサ

イズは35名を限度とすることになった。そのため、学生１人１人への目が向けやすくなったと言える。

上記 2)に関しては、未修外国語では初年次に、主に文法を中心とした初級Ａ、主に表現練習を中心とした初級Ｂの週２コマを履修するが、各授業では語学の知識のみならず、背景となる言語文化に関する知識も教授することを、すべての教員が試みていると言える。特に初級Ｂでは文学テキストや時事的なトピックも扱うなど、多くの工夫がなされているのが現状である。

2016年４月に教養教育改革が実施され、全学共通科目は２学期クオーター制となり、クオーター開講科目となった。このため、第１章で述べた「神戸スタンダード」を全学部生が身につけるため、主として１・２年生が学修する「基礎教養科目」及び「総合教養科目」として開講することになった。また１・２年生だけでなく専門分野を学んだ高学年も対象とする科目として、「高度教養科目」を設け、４年間を通じて学ぶ教養教育のカリキュラムを提供している。高度教養科目である「外国語セミナーＡ～Ｆ」では、各教員の専門分野を活かした授業運営の試みが行われており、さらにその言語や背景となる文化について理解を深めることを希望する学生、留学を希望する学生が選択できる授業を多く提供している。

外部評価には、その他、「２年次或いは３年次に専修科目としてラテン語やギリシャ語も選択肢として加え、西欧現代諸語へのさまざまな影響を追認させるのも良かろう。」という意見も伊川委員からあったが、2023年度では全学において「多言語セミナー（ラテン語)」が開講されており、文学部開講科目として「西洋古典語：ラテン語」「西洋古典語：ギリシャ語」が開講されている。これらのことから、上記 2）についても改善があったと考えられる。

上記 3)については、基礎科目を１、２年次、専門科目を３、４年といった水平的な積み上げではなく、早くから学部の基礎的専門教育を開始し、後に基礎的な科目の選択も許すような試みを提案するものであるが、現行の制度では、第１章で述べたように、ベーシック科目の初級A1～4/B1～4が積み上げ式となっており、その上にさらにアドバンスド科目が設置されている。また全学部の１年次の必修科目となっているため、現状での対応はできていない。しかしながら、2025年度に予定されている教養教育改革においては、高度教養科目を廃止し、学生の興味、専門に合わせて１年次からこれまで高度教養科目とされていた専門性の高い授業等も履修することが可能な枠組みが提案されつつある。また、2025年 4 月に設立予定のシステム情報学部においては、外国語科目が１年次に必修ではなくなる見込みとなっており、外国語教育選択の自由度は今後増していくものと考えられる。

上記 4)①の国際文化学部、国際コミュニケーションセンター、文系学部の英語以外の外国語・外国文化・国際社会等を専門とする部局との連携については、2016年当時とは専任教員が多く入れ替わっており、従来の未修外国語担当教員は当該言語の語学・文学を専門とする者が多かったが、近年ではその他の分野を専門分野とする教員が増え、また学内でも様々な共同研究プロジェクトが推進される中、様々な専門分野の教員と語学担当教員との接点が大きく増えてきた。以下に専任教員の専門分野を挙げる。

No.	ドイツ語	氏名	専門分野
1	講師	安田　麗	音声学
2	助教	芹澤　円	ドイツ語学
3	特任助教	Christopher Schelletter	ドイツ文学
4	教授	増本　浩子	ドイツ文学
5	准教授	久山　雄甫	ドイツ文学
6	教授	上野　成利	社会思想史
7	教授	林　良子	音声科学・言語学
8	教授	藤濤　文子	翻訳論
9	准教授	石田　圭子	美学
10	講師	新川　匠郎	国際関係論
11	講師	衣笠　太朗	西洋史

外国語第 II（フランス語）

No.	職名	氏名	専門分野
1	准教授	廣田　大地	フランス文学・フランス語教育
2	教授	中畑　寛之	フランス文学
3	講師	廣田　郷士	フランス文学
4	教授	岩本　和子	フランス文学
5	講師	石田　雄樹	フランス文学
6	講師	礒谷　有亮	西洋美術史
7	助教	鹿野　祐嗣	哲学

外国語第 II（中国語）

No.	職名	氏名	専門分野
1	准教授	髙橋　康徳	言語学・中国語学
2	講師	陳　暁	中国語学
3	教授	康　敏	情報科学・教育工学

4	教授	谷川　真一	政治学
5	講師	李　昊	比較政治学

外国語第 II（ロシア語）

No.	職名	氏名	専門分野
1	講師	髙田　映介	ロシア文学

一方で、4)の指摘にあるように、「未修外国語の担当は国際文化学部と国際コミュニケーションセンター所属の教員に集中している。とりわけ国際文化学部の教員は、学部や大学院の授業も担当していることを思えば、かなりの負担過重になっているとの印象を受ける。」という点については、現在もその状況は改善されたとは言えない。ただし、2016 年度時点では、国際文化学部（正しくは国際文化学研究科）所属教員の授業負担数は、年間 5 コマから 4 コマとなり、さらに国際文化学研究科独自の制度として「科学研究費補助金の採択に伴う非常勤講師人件費配分申請」が可能となったことから、今後この制度を利用して共通教育の負担軽減を申請する者も出てくる可能性がある。なお、科学研究費取得によるバイアウト制度については、2023 年度現在、全学共通科目では適応が認められていない。

上記 4）の②留学業務を担当する組織および教員間の連携については、2017 年 4 月に神戸大学国際文化学部と発達科学部を再編統合し、神戸大学国際人間科学部が設置され、国際人間科学部では海外留学（短期・長期いずれか）がグローバルスタディーズプログラム（GSP）として必修となったことから、国際人間科学部生が未修外国語の授業で習った言語を用いることができる国への留学に目を向けるようになった。外国語担当教員の多くが、国際文化学研究科と国際人間科学部に所属しているため、結果として、海外留学に関する情報が未修外国語の教育の現場に入ってきやすくなった。さらに、2022 年 4 月に国際教育総合センター（旧留学生センター）がグローバル教育センターとして改組され、海外派遣教育部門が新設され、全学の海外留学を所轄する部署が設置された。偶然にも外国語第 II 部会長である林良子教授（国際文化学研究科配置）が 2022 年度より海外派遣教育部門長を務めることになったことから、国際人間科学部のみを対象とした GSP の海外留学だけではなく、全学を対象とした交換留学、海外短期研修（神戸グローバルチャレンジプログラム）に関する情報も得やすくなり、関係部局間の連携と協力が大きく改善したと言える。

海外語学研修は、2015 年度までは中国語（北京外国語大学）、フランス語（リヨン・カトリック大学）、2019 年度まではドイツ語（グラーツ大学）の夏季研修を国際コミュニケーションセンターが行っていたが、教員帯同経費の打ち切りや、コロナ禍による中止、スタッフの入れ替え等の理由により、現在は国際コミュニケーションセンター主催の未修外国語の海外研修は行われていない。そのため、上記 GSP や GCP による運営へと転換が図られている最中であると言える。

（参考）http://www.iphe.kobe-u.ac.jp/solac/sup-overseas.html

国際コミュニケーションセンター　海外外国語研修について（2024 年 1 月 4 日閲覧）

以上

巻末補足資料

1. シラバス例
   ドイツ語Ａ１、フランス語Ａ１、中国語Ｂ１、ロシア語Ａ１
   ドイツ語中級Ｃ１、外国語セミナーＡ（ドイツ語）

2. 2023 年度　ドイツ語、フランス語教科書一覧

3. 外国語第Ⅱクラス分け基準

開講科目名	ドイツ語初級Ａ１				
成績入力担当	上野 成利			開講区分	単位数
				第1クォーター	0.5単位
ナンバリングコード	U1CB101	曜日・時限等	火3(対面)	時間割コード	1U408

授業のテーマ

この授業では基礎的なドイツ語の知識を文法を中心に体系的に学習します。外国語第II（未修外国語）としてドイツ語を選んだ人が必ず履修しなければならない科目です。ドイツ語は、今日、東西両ドイツの統一と欧州連合(EU)に基づくヨーロッパ統合を経て、さらに中東欧への市場拡大の時代を迎え、ますます情報伝達の手段としての役割を顕著にしてきています。幅広く国際社会で活躍しようとする人にとっても、多彩で奥行きのあるヨーロッパの歴史や文化に関心のある人にとっても、また環境問題のような現代的な課題に取組もうとする人にとっても、ドイツ語を学ぶ意義はきわめて大きいといえるでしょう。そうしたドイツ語圏に関する知識を得、理解するための第一歩としてドイツ語の基礎をしっかり身につけることが、初年度の授業のテーマです。

授業の到達目標

ドイツ語の基礎的な文法知識や日常的なコミュニケーションの基本的表現などの習得をとおして、基礎的なドイツ語能力（読む・書く・聞く・話す力）を身につけることを目標とします。

授業の概要と計画

ドイツ語初級A1は、ドイツ語学習の最初のクォーターの授業として、ドイツ語初級B1と相補的に、ドイツ語によるコミュニケーションや読解の基礎となるドイツ語文法の習得をめざします。1年次第１クォーター開講科目。

第1回：挨拶／発音の原則
第2回：動詞の現在人称変化
第3回：seinの現在人称変化
第4回：名詞の性と格
第5回：冠詞の格変化
第6回：不規則変化動詞
第7回：命令形
第8回：試験／まとめ

成績評価方法

期末試験90%、授業への参加度（各回の発言等）10%

成績評価基準

初級文法をどれだけ正確に理解し、知識を定着させているかという観点から、成績評価を行ないます。

履修上の注意（関連科目情報）

「ドイツ語初級B1」の授業も真剣に受講してください。

事前・事後学修

毎回課される宿題をかならず済ませたうえで受講してください。
本学では1単位あたりの学修時間を45時間としています。毎回の授業にあわせて事前学修・事後学修を行ってください。

オフィスアワー・連絡先

随時（メールで事前に連絡してください）
ueno@people.kobe-u.ac.jp

開講科目名	フランス語初級Ａ１				
成績入力担当	中畑　寛之			開講区分	単位数
				第1クォーター	0.5単位
ナンバリングコード	U1CC101	曜日・時限等	木4(対面)	時間割コード	1U498

授業のテーマ

「明晰でないものはフランス語ではない」という有名な言葉があるように、フランス語はとても合理的で明快な構造を持っている言語です。フランス語の学習を通じて、言葉自体の面白さを味わうとともに、豊かな歴史や文化に触れたいと思います。なぜなら言語を学ぶことは文化を学ぶことでもあるからです。またフランス語は英語とともに重要な国際共通語であり、国連やEUの公用語であるだけでなく、中東やアフリカの多くの国々、アジアやアメリカの一部でも使われています。フランス語を知ることによって、現代世界における政治、経済、社会問題にも視野を広げ、英語一辺倒ではない世界を知ってほしいと思います。

授業の到達目標

フランス語の基礎的な文法知識や日常コミュニケーションの基本的表現などの習得をとおして、基礎的なフランス語能力（読む・書く・聞く・話す力）を身につけることを目標とします。フランス語初級A1は、フランス語学習の第1クォーターの授業として、フランス語初級B1と相補的に、フランス語によるコミュニケーションや読解の基礎となるフランス語文法の習得をめざします。1年次第1クォーター開講科目。

授業の概要と計画

この授業は原則、対面で行います（コロナ感染が続くようであれば、「遠隔」での対応をします）。
テクストの各課に沿って、順次、授業を進めます。おおまかの進度は以下のとおり。

第1回：綴り字の読み方・発音
第2回：主語人称代名詞・-er動詞
第3回：-er動詞（続）・否定文・名詞の性数
第4回：冠詞・提示表現
第5回：疑問文・否定疑問文・-ir動詞
第6回：être・avoir
第7回：所有形容詞・指示形容詞
第8回：まとめ・試験

成績評価方法

積極的な授業への参加
学期末テスト（90%以上）
（授業内に行う小テストを評価に含む場合もあります）

詳しくは第１回目の授業時に説明します。

成績評価基準

フランス語文法の基礎知識がきちんと身についているかどうか。
学期末テストの得点を主として判断します。

履修上の注意（関連科目情報）

この授業は原則、対面で行います。
教科書だけでなく、辞書も忘れずに持ってくること。

事前・事後学修

充分な予習と復習が必須です。動詞活用をしっかり覚えること、十分な単語力を身につけることを求めます。
事前学習：わからない単語は必ず辞書で調べておくこと。
事後学習：BEEF上に練習問題をアップしますので、それを用いて授業の復習をすること。
本学では1単位あたりの学修時間を45時間としています。毎回の授業にあわせて事前学修・事後学修を行ってください。

開講科目名	中国語初級Ｂ１				
成績入力担当	高橋　康徳			開講区分	単位数
				第1クォーター	0.5単位
ナンバリングコード	U1CD101	曜日・時限等	木4(対面)	時間割コード	1U620

授業のテーマ

皆さんが中国語を学ぶ意義は、次の4点にあります。
　第1に、世界の人口の4分の1近くの人々が中国語を曲がりなりにも話せます。中国大陸と台湾の人口に世界各地の華僑・華人を加えると約14億人になります。
　第2に、中国語はアジアの言語の中で唯一、国連の公用語として使われています。
　第3に、中国と日本とは一衣帯水の位置関係にあります。日中双方で互いの言語を学ぶ人々が増えることは、両国民の間の相互理解と交流の促進につながります。
　第4に、近年、経済や文化の交流が著しく進展したことによって、中国語を実践的に使う機会もますます多くなってきました。米国やヨーロッパ諸国でも中国語学習ブームが起こっています。

授業の到達目標

この授業の目標は、次の2点からなります。
　1.中国語の会話、文法、作文、読解の基礎を身につける。
　2.中国の社会や文化に対する興味を喚起し、中国語を独習する力を培う。

授業の概要と計画

毎回、テキストの1課ずつを進む予定ですが、課によっては1回で終わらない場合もあります。各課は、(1)会話本文、(2)文法のポイント、(3)練習問題、(4)比較文化クイズから構成されています。
第1回（対面）：イントロダクション
第2回～第4回（対面）：中国語の発音（ピンイン）
第5回（対面）：ピンインの総復習・第1課
第6回（対面）：第2課
第7回（対面）：第3課
第8回（対面）：まとめ・試験

成績評価方法

平常点60%、期末試験40%の成績により評価します。平常点に関しては授業への参加度（授業での発音練習など）や課題・小テストへの取り組みの度合い、特にピンインについて正確に理解できているかを判断して評価を行う。

成績評価基準

中国語のピンイン・入門レベルの文法について正確に理解できているか。

履修上の注意（関連科目情報）

授業に毎回出席することは勿論のこと、積極的に参加するよう心掛けてください。

事前・事後学修

辞書やテキスト付属ＣＤなどを活用して、積極的に予習・復習をするよう心掛けて下さい。
本学では1単位あたりの学修時間を45時間としています。毎回の授業にあわせて事前学修・事後学修を行ってください。

オフィスアワー・連絡先

BEEFのメッセージ機能で質問や相談を随時受け付けます。

開講科目名	ロシア語初級Ｂ１				
成績入力担当	高田　映介			開講区分	単位数
				第1クォーター	0.5単位
ナンバリングコード	U1CE101	曜日・時限等	木3(対面)	時間割コード	1U654

授業のテーマ

ロシア語学習の第一歩は文字をしっかり覚えることです。キリル文字といって、ギリシャ文字に似た独特の文字を使います。発音の規則がそれほど複雑ではないので、文字をしっかり覚えれば、文章を声に出して読むのは比較的簡単です。

単語はコツコツと覚える必要があります。ロシア語も英・独・仏語などと同じインド・ヨーロッパ語の仲間なので、単語や表現に似ているものもありますが、かなり違うものも多いのです。声に出して繰り返し発音することで、ロシア語の音に慣れると覚えやすくなるかもしれません。

ロシア語の難しさでもあり、醍醐味でもあるのが、変化が沢山あることです。授業では１年間かけて少しずつ学びます。新しく学ぶことが多いので、きちんと授業に出て説明を聞くこと、復習をしっかりすることが絶対に必要です。たとえていえば、急だけれど低い山のようなもの。確かに最初こそ大変ですが、変化を覚えてしまえば、読んだり話したりすることがかなり出来るようになります。

ロシア語が理解できるようになれば、チェコ語、ポーランド語、ブルガリア語など、同じスラヴ語群に属し、ロシア語と共通点の多い言葉も学びやすくなり、新しい世界が広がることでしょう。

授業の到達目標

１年次の授業では、基礎文法を理解するとともに、挨拶を含め、簡単な表現を使えるようになることが目標です。

授業の概要と計画

対面授業

教科書はＡ・Ｂクラスとも共通で『ロシア語の世界へ！初心者の旅』を使います。
前期
A1-A2：　基礎文法に重点をおいてロシア語を学びます。
B1-B2：　A1-A2　で学んだ文法事項を補足しながら、ロシア語を読み書き話す総合的な練習をします。
後期
A3-A4：　A1-A2に引き続き、基礎文法に重点をおいてロシア語を学びます。
B3-B4：　B1-B2に引き続き、ロシア語を使う総合的な練習をします。
1Q
第1回・第2回：文字、発音、挨拶、性別、疑問詞、人称代名詞、否定文などについて
第3回・第4回：名詞の性、疑問文、名詞の複数形、所有代名詞などについて
第5回・第6回：形容詞、動詞の現在変化、対格、副詞などについて
第7回・第8回：まとめ・試験
2Q
第1回・第2回：動詞の過去形、前置格、対格（人称代名詞と疑問代名詞）などについて
第3回・第4回：所有の表現　ｙ＋生格、生格（名詞・人称代名詞）などについて
第5回・第6回：ｘｏｔｅｔｂ　不定形、動詞の体、不完了体・完了体の過去などについて
第7回・第8回：まとめ・試験

成績評価方法

・授業への参加度（各回の積極的な学習態度や指名された場合の正答率等）60%、課題40%で評価する。

成績評価基準

ロシア語文字の読み書きができて、簡単な会話はできているか

開講科目名	ドイツ語中級Ｃ１				
成績入力担当	安田　麗			開講区分	単位数
				第1クォーター	0.5単位
ナンバリングコード	U1CB201	曜日・時限等	木2(ハイブリッド（対面）)	時間割コード	1U452

授業のテーマ

ドイツ語の高度な文法事項を習得し，読解力や言語運用能力を養成します．

授業の到達目標

１．ドイツ語初級で学習した初級文法の知識を確認しつつ，ドイツ語のテキストを読んで理解できる．
２．発音や会話，聞き取り練習を行い基礎的なドイツ語表現に慣れ確実に反応できるようになる．
３．学習を通じて，ドイツの生活や文化に関する理解を深める．

授業の概要と計画

ドイツ語中級Cは、ドイツ語の初級文法をすでに学習していることを前提とし，より高度なドイツ語によるコミュニケーション能力や読解力の習得をめざします。

第1回：Kapitel 1 Deutschland
第2回：Kapitel 1 Deutschland
第3回：Kapitel 1 Deutschland
第4回：Kapitel 2 Reise mit Zug und Fahrrad
第5回：Kapitel 2 Reise mit Zug und Fahrrad
第6回：Kapitel 2 Reise mit Zug und Fahrrad
第7回：Kapitel 3 Aus dem Märchenwald
第8回：総括・試験

本講義は対面を基本とし，オンライン交流の際は遠隔（リアルタイム配信型）で実施します．

協定校であるグラーツ大学の学生とのオンライン交流を数回実施予定です．具体的な計画は受講者と相談して決定します．

感染の状況によっては、授業の様態を変更する場合があります。その場合はBEEF等によって通知します。

成績評価方法

授業への参加態度（小テストや発表を含む）50%，期末試験50%をもって総合的に評価します．

成績評価基準

１．ドイツ語のテキストを読んで理解できる．
２．ドイツ語表現を使ってコミュニケーションができる．
３．ドイツの生活や文化について理解を深める．

履修上の注意（関連科目情報）

初級で使用した教科書，辞書を持参してください．オンライン交流の際にはPC，ヘッドフォンが必要です．

事前・事後学修

毎回の授業範囲の予習，復習を各自で行い，テキストの単語の意味を理解しておいてください．
本学では1単位あたりの学修時間を45時間としています。毎回の授業にあわせて事前学修・事後学修を行ってください。

オフィスアワー・連絡先

各授業の前後に時間をとります．

開講科目名	外国語セミナーＡ（ドイツ語）				
成績入力担当	安田　麗			開講区分	単位数
				第3クォーター	1.0単位
ナンバリングコード	U1II500	曜日・時限等	木3(ハイブリッド（対面）)	時間割コード	3U472

授業のテーマ

ドイツ語圏での生活に必要なドイツ語運用能力を身につける．読む，聞く，話す，書くの４技能すべてを向上させ，ドイツ語を実践的な場面で使用できるように訓練します．

授業の到達目標

日常で必要なドイツ語を辞書なしで読んで理解することができる，語彙や表現を聞き理解することができる，自分のことや要求をドイツ語で表現して相手に伝えることができる，ドイツ語でメールや手紙を書くことができる．

授業の概要と計画

ドイツ語の読む，書く力を学術的な文書を読んだり，メールや自己アピールを書く練習をし専門的な運用能力を養います．話す，聞く力を身に付けるためプレゼンテーションやリスニング練習を実践的に行います．

第1回～第3回：ドイツ語の読む，聞く，書く，話す技能の実践練習（受動態，関係代名詞，不定詞句）
第4回～第6回：ドイツ語の読む，聞く，書く，話す技能の実践練習（接続法Ⅱ，丁寧な頼み方）
第7回：ドイツ語の読む，聞く，書く，話す技能の実践練習
第8回：総括・期末課題

本講義は対面を基本とし，オンライン交流の際は遠隔（リアルタイム配信型）で実施します．

協定校であるグラーツ大学の学生とのオンライン交流を数回実施予定です．具体的な計画は受講者と相談して決定します．

感染の状況によっては、授業の様態を変更する場合があります。その場合はBEEF等によって通知します。

成績評価方法

授業への参加態度および予習･復習や課題の提出：60%
期末課題：40%

成績評価基準

ヨーロッパ共通参照枠A2/B1の諸観点に基づいて，授業中の活動および期末試験の結果を総合的に評価します．

履修上の注意（関連科目情報）

ドイツ語のA1レベルを習得していることを前提に授業を進めます．オンライン交流の際にはPC，ヘッドフォンが必要です．

事前・事後学修

授業で出される課題を自習したり，発表の準備をしたりすることが必要です．
本学では1単位あたりの学修時間を45時間としています。毎回の授業にあわせて事前学修・事後学修を行ってください。

オフィスアワー・連絡先

各授業の前後で時間を取ります．

学生へのメッセージ

オンライン教材等を使用した自主学習を積極的に行ってください．

ドイツ語 教科書リスト［2023 年度］ ＊全６頁

【ドイツ語初級Ａ】

クラス	開講時限（前期／後期）	担当教員（前期／後期）	著者	書名	出版社
A1	木４（通年）	久山（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
A2	火４（通年）	増木（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
A3	木４（通年）	石田（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
A4	火４（通年）	永谷（通年）	杉村涼子	基礎固めのドイツ語	郁文堂
A5	木３（通年）	石田（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
A6	火３（通年）	北川（通年）	―――	（特定の教科書は使用しません。教材は適宜コピーして配布します。）	―――
A7	木３（通年）	吉田（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
A8	火３（通年）	上野（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
A9	木２（通年）	衣笠（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
A10	木２（通年）	馬場（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ・エクスプレス初級ドイツ語ゼミナール	白水社
A11	火１／火２	安田（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
A12	火１／火２	林（通年）	林 良子	４ステップドイツ語	郁文堂
A13	火１／火２	植（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ・エクスプレス初級ドイツ語ゼミナール	白水社
A14	木２（通年）	新川（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
A15	木１（通年）	衣笠（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
A16	木１（通年）	馬場（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ・エクスプレス初級ドイツ語ゼミナール	白水社
A17	火２／火１	安田（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
A18	火２／火１	林（通年）	林 良子	４ステップドイツ語	郁文堂
A19	火２／火１	植（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ・エクスプレス初級ドイツ語ゼミナール	白水社
A20	木１（通年）	新川（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社

【ドイツ語初級Ｂ】

クラス	開講時限（前期／後期）	担当教員（前期／後期）	著者	書名	出版社
B1	火４（通年）	シェレター（通年）	新倉真矢子 他	シュピッツェ！１コミュニケーションで学ぶドイツ語	朝日出版社
B2	木４（通年）	毛利（通年）	毛利真実	ドイツ語をはじめましょう　初級ドイツ語［三訂版］	アルク
B3	木４（通年）	北川（通年）	―――	（特定の教科書は使用しません。教材は適宜コピーして配布します。）	―――
B4	火４（通年）	トゥルンマー／野上	―――	（特定の教科書は使用しません。教材は適宜コピーして配布します。）	―――
B5	火３（通年）	シェレター（通年）	新倉真矢子 他	シュピッツェ！１コミュニケーションで学ぶドイツ語	朝日出版社
B6	木３（通年）	北川／久山	新倉真矢子 他	シュピッツェ！１コミュニケーションで学ぶドイツ語	朝日出版社
B7	火３（通年）	永谷（通年）	田原憲和　他	ドイツ語＋α　コミュニケーション	郁文堂
B8	木３（通年）	毛利（通年）	毛利真実	ドイツ語をはじめましょう　初級ドイツ語［三訂版］	アルク
B9	火１／火２	芹澤（通年）	新倉真矢子 他	シュピッツェ！１コミュニケーションで学ぶドイツ語	朝日出版社
B10	火１／火２	藤井（通年）	清野智昭	ドイツ語の時間〈恋するベルリン〉Web 改訂版 エピローグ付	朝日出版社
B11	木２（通年）	シェレター（通年）	新倉真矢子 他	シュピッツェ！１コミュニケーションで学ぶドイツ語	朝日出版社
B12	木２（通年）	橋木（通年）	飯田道子 他	アプファールト〈ノイ〉　スキットで学ぶドイツ語　第５版	三修社
B13	木２（通年）	横田	春日正男　他	わかるぞドイツ語！みえるぞドイツ！WEB 改訂版	朝日出版社
B14	火１／火２	中村（通年）	佐藤和弘 他	ドイツへ行ってみませんか Ver.3	郁文堂
B15	火２／火１	芹澤（通年）	新倉真矢子 他	シュピッツェ！１コミュニケーションで学ぶドイツ語	朝日出版社
B16	火２／火１	中村（通年）	佐藤和弘 他	ドイツへ行ってみませんか Ver.3	郁文堂
B17	木１（通年）	横田（通年）	春日正男　他	わかるぞドイツ語！みえるぞドイツ！WEB 改訂版	朝日出版社
B18	木１（通年）	橋木（通年）	飯田道子 他	アプファールト〈ノイ〉　スキットで学ぶドイツ語　第５版	三修社
B19	木１（通年）	シェレター（通年）	新倉真矢子 他	シュピッツェ！１コミュニケーションで学ぶドイツ語	朝日出版社
B20	火２／火１	藤井（通年）	清野智昭	ドイツ語の時間〈恋するベルリン〉Web 改訂版 エピローグ付	朝日出版社

【第三外国語（ドイツ語）　T1・T2・T3・T4】

クラス（編入するＡクラス）	開講時限（前期／後期）	担当教員（前期／後期）	著者	書名	出版社
第三外国語（A11）	火１／火２	安田（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
第三外国語（A17）	火２／火１	安田（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
第三外国語（A8）	火３（通年）	上野（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
第三外国語（A2）	火４（通年）	増本（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
第三外国語（A20）	木１（通年）	新川（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
第三外国語（A14）	木２（通年）	新川（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
第三外国語（A5）	木３（通年）	石田（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社
第三外国語（A3）	木４（通年）	石田（通年）	上野成利・本田雅也	パノラマ　初級ドイツ語ゼミナール［第三版］	白水社

＊第三外国語（２年次選択）は初級Ａクラスに編入する形。前期・後期に同じ時間帯で履修できない学生でも同じ教科書を使えるよう第三外国語クラスを設定する。

【選択クラス】

クラス	開講時限	担当教員	著者	書名	出版社
ドイツ語初級ＳＡ	後期：火５	安田	―――	（特定の教科書は使用しません。教材は適宜コピーして配布します。）	―――
ドイツ語初級ＳＢ	後期：木５	シェレター	Daniela Niebisch 他	Schritte international neu A1.1	Hueber
ドイツ語中級Ｃ１・Ｃ２	前期：木２	安田	和泉 雅人　他	ファウストとメフィストと学ぶ ドイツ文化８章　プラス・エクストラ	三修社
ドイツ語中級Ｃ１・Ｃ２	前期：木３	安田	和泉 雅人　他	ファウストとメフィストと学ぶ ドイツ文化８章　プラス・エクストラ	三修社
ドイツ語中級Ｃ１・Ｃ２	前期：木３	芹澤	Susanne Schermann 他	ウィーン万華鏡	三修社
外国語セミナー（ドイツ語）Ａ・Ｂ	後期：水５	芹澤	―――	（特定の教科書は使用しません。教材は適宜コピーして配布します。）	―――
外国語セミナー（ドイツ語）Ａ・Ｂ	後期：木２	芹澤	―――	（特定の教科書は使用しません。教材は適宜コピーして配布します。）	―――
外国語セミナー（ドイツ語）Ａ・Ｂ	後期：木３	安田	―――	（特定の教科書は使用しません。教材は適宜コピーして配布します。）	―――
外国語セミナー（ドイツ語）Ｃ・Ｄ	前期：水５	芹澤	―――	（特定の教科書は使用しません。教材は適宜コピーして配布します。）	―――
外国語セミナー（ドイツ語）Ｅ・Ｆ	後期：水５	藤濤	―――	（特定の教科書は使用しません。教材は適宜コピーして配布します。）	―――

神戸大学全学共通教育・2023 年度フランス語教科書リスト

※各教科書の詳細、ならびに 2 年次以降の開講クラスに関しては 2 ページ目を確認してください。

【1 年次科目】

学部	第1・第2クォーター					第3・第4クォーター				
	クラス	科目	担当教員	時限	教科書	クラス	科目	担当教員	時限	教科書
文学部・経済学部・経営学部	1	A	中畑	木4	ボン、アロンジ!	1	A	中畑	木4	ボン、アロンジ!
		B	武内	火4	Dis-moi tout!		B	未定	火4	Dis-moi tout!
	2	A	廣田	火4	ル・フランセ・クレール	2	A	未定	火4	ル・フランセ・クレール
		B	ヴュ	木4	Moi, je… コミュニケーション（旧版）		B	ヴュ	木4	Moi, je… コミュニケーション（旧版）
	3	A	鹿野	木4	ヴワラ!	3	A	鹿野	木4	ヴワラ!
		B	ｽﾄｷﾝｼﾞｪﾙ	火4	Moi, je… コミュニケーション（旧版）		B	ｽﾄｷﾝｼﾞｪﾙ	火4	Moi, je… コミュニケーション（旧版）
	4	A	石田	火4	ル・フランセ・クレール	4	A	岩本	火4	ル・フランセ・クレール
		B	大山	木4	場面で学ぶフランス語 I		B	大山	木4	場面で学ぶフランス語 I
	5	A	小畑	火4	ル・フランセ・クレール	5	A	小畑	火4	ル・フランセ・クレール
		B	山崎	木4	Spirale Nouvelle edition		B	山崎	木4	Spirale Nouvelle edition
国際人間学部・法学部	6	A	廣田	木3	ル・フランセ・クレール	6	A	鹿野	木3	ル・フランセ・クレール
		B	武内	火3	Dis-moi tout!		B	未定	火3	Dis-moi tout!
	7	A	石田	火3	新・フランス語文法	7	A	石田	火3	新・フランス語文法
		B	釣	木3	Dis-moi tout!		B	未定	木3	Dis-moi tout!
	8	A	小畑	火3	ル・フランセ・クレール	8	A	小畑	火3	ル・フランセ・クレール
		B	山崎	木3	Spirale Nouvelle edition		B	山崎	木3	Spirale Nouvelle edition
	9	A	大山	木3	ル・フランセ・クレール	9	A	大山	木3	ル・フランセ・クレール
		B	ｽﾄｷﾝｼﾞｪﾙ	火3	Moi, je… コミュニケーション（旧版）		B	ｽﾄｷﾝｼﾞｪﾙ	火3	Moi, je… コミュニケーション（旧版）
	10	A	廣田	火3	ル・フランセ・クレール	10	A	廣田	火3	ル・フランセ・クレール
		B	ヴュ	木3	Moi, je… コミュニケーション（旧版）		B	ヴュ	木3	Moi, je… コミュニケーション（旧版）
理学部・医学部・農学部	11	A	釣	木2	ル・フランセ・クレール	11	A	釣	木2	ル・フランセ・クレール
		B	廣岡	火1	Moi, je… コミュニケーション（A1）		B	廣岡	火2	Moi, je… コミュニケーション（A1）
	12	A	礒谷	木2	ル・フランセ・クレール	12	A	礒谷	木2	ル・フランセ・クレール
		B	武内	火1	私だけのフランス語ノート		B	武内	火2	私だけのフランス語ノート
	13	A	浅野	火1	大学 1,2 年生のためのすぐわかるフランス語	13	A	浅野	火2	大学 1,2 年生のためのすぐわかるフランス語
		B	武内	木2	私だけのフランス語ノート		B	武内	木2	私だけのフランス語ノート
	14	A	山口	火1	ル・フランセ・クレール	14	A	山口	火2	ル・フランセ・クレール
		B	川口	木2	Moi, je… コミュニケーション（A1）		B	川口	木2	Moi, je… コミュニケーション（A1）
工学部・海洋政策学部	15	A	廣田	火2	ル・フランセ・クレール	15	A	未定	火1	ル・フランセ・クレール
		B	川口	木1	Moi, je… コミュニケーション（A1）		B	川口	木1	Moi, je… コミュニケーション（A1）
	16	A	岩本	木1	ル・フランセ・クレール	16	A	岩本	木1	ル・フランセ・クレール
		B	廣岡	火2	Moi, je… コミュニケーション（A1）		B	廣岡	火1	Moi, je… コミュニケーション（A1）
	17	A	浅野	火2	大学 1,2 年生のためのすぐわかるフランス語	17	A	浅野	火1	大学 1,2 年生のためのすぐわかるフランス語
		B	武内	木1	私だけのフランス語ノート		B	武内	木1	私だけのフランス語ノート
	18	A	礒谷	木1	ル・フランセ・クレール	18	A	礒谷	木1	ル・フランセ・クレール
		B	武内	火2	私だけのフランス語ノート		B	武内	火1	私だけのフランス語ノート
	19	A	山口	火2	ル・フランセ・クレール	19	A	山口	火1	ル・フランセ・クレール
		B	釣	木1	私だけのフランス語ノート		B	釣	木1	私だけのフランス語ノート

【2年次科目】

第1・第2クォーター			
科目	教員	時限	教科書
フランス語中級 C1・C2	廣田	水5	「Quoi de neuf ?」
フランス語中級 C1・C2	岩本	木2	「フランコフォニーへの旅」
フランス語中級 C1・C2	鹿野	木 3	プリント配布

第3・第4クォーター			
科目	教員	時限	教科書
外国語セミナー（フランス語）A・B	廣田	水5	プリント配布
外国語セミナー（フランス語）A・B	石田	木2	「時事フランス語」
外国語セミナー（フランス語）A・B	未定	木3	プリント配布

【3年次科目】

第1・第2クォーター			
科目	教員	時限	教科書
外国語セミナー（フランス語）C・D	ヴュ	木2	プリント配布

第3・第4クォーター			
科目	教員	時限	教科書
外国語セミナー（フランス語）E・F	未定	水5	プリント配布

フランス語・各教科書の詳細

【A の教科書詳細】

略称	詳細
ボン、アロンジ!	朝倉三枝他『ボン、アロンジ!（Bon, allons-y !）』朝日出版社、2017 年、ISBN: 978-4-255-35271-8
ヴワラ!	伊勢晃他『ヴワラ!（Voilà !）』早美出版社、2018 年、ISBN：978-4-86042-047-5
ル・フランセ・クレール	清岡智比古『ル・フランセ・クレール（三訂版）（Le Français clair）』白水社、2021 年、ISBN: 978-4-560-06138-1
新・フランス語文法	大阪大学『新・フランス語文法』編纂部会『新・フランス語文法　四訂版』朝日出版社、2023 年、ISBN: 978-4-255-35338-8
大学 1，2 年生のためのすぐわかるフランス語	中島万紀子『大学 1，2 年生のためのすぐわかるフランス語』東京図書、2005 年、ISBN；978-4-489-00716-3

【B の教科書詳細】

略称	詳細
Dis-moi tout!	レナ・ジュンタ、清岡智比古『ぜんぶ話して！［改訂版］（Dis-moi tout! nouvelle édition）』白水社、2021 年、ISBN: 978-4-560-06140-4
Moi, je… コミュニケーション（A1）	Vannieuwenhuyse et al.『Moi, je… コミュニケーション A1』アルマ出版、2023 年、ISBN：978-4-905343-33-2
Moi, je… コミュニケーション（旧版）	Vannieuwenhuyse et al.『Moi, je… コミュニケーション』アルマ出版、2012 年、ISBN：978-4-905343-03-5
Spirale Nouvelle edition	Gaël CRÉPIEUX, Philippe CALLENS『Spirale Nouvelle edition（新スピラル － 日本人初心者のためのフランス語教材）』Hachette、2015 年、ISBN: 978-2-014-01581-2
私だけのフランス語ノート	釣馨、武内英公子『私だけのフランス語ノート』朝日出版社、2020 年、ISBN: 978-4-255-35309-8
場面で学ぶフランス語 1	高橋百代他『ワークブック付　場面で学ぶフランス語 1［三訂版］』三修社、2018 年、ISBN: 978-4-384-22055-1

【2 年次以降のクラスの教科書詳細】

略称	詳細
Quoi de neuf ?	レナ・ジュンタ、清岡智比古、オリヴィア・ボワセル『クワ・ドゥ・ヌフ? Z 世代のリアル・フランス（Quoi de neuf ?）』白水社、2023 年、ISBN: 978-4-560-06152-7
フランコフォニーへの旅	小松祐子、ジル・デルメール『フランコフォニーへの旅 改訂版』駿河台出版社、2019 年、ISBN: 978-4-411-00927-2
時事フランス語	石井洋二郎、ミシェル・サガズ『時事フランス語 2023 年度版』、朝日出版社、ISBN: 978-4-255-35343-2

令和5年度　外国語第Ⅱクラス分け基準

○アルファベットの示す学部（学科）名について
L：文学部　H1：国際人間科学部（グローバル文化学科）　H2：国際人間科学部（グローバル文化学科以外の学科）
J：法学部　E：経済学部　B：経営学部　S：歯学部　MM：医学部（医学科）
MH：医学部（保健学科）　T：工学部　A：農学部　Z：海洋政策科学部

令和5年度のクラス増減

中国語2クラス増（LEB枠+1、TZ枠+1）
ロシア語1クラス減（LEB枠-1）

履修言語	クラス番号	学件数 クラス人数	学件数 内訳	内訳	学部別人数	学部別人数
ドイツ語	1	33	L	27	L	27
			E	6		
	2	34	E	34	E	68
					B	38
	3	33	E	28	計	133
			B	5		
	4	33	B	33	ークラス平均人数	33.25
	5	35	H1	20	H1	20
			H2	15	H2	61
	6	34	H2	34	J	56
	7	34	H2	12	計	137
			J	22		
	8	34	J	34	ークラス平均人数	34.25
	9	34	S	34	S	47
	10	34	S	13	MM	46
			MM	21	MH	64
	11	33	MM	25	A	43
			MH	8	計	200
	12	33	MH	33		
	13	33	MH	23	ークラス平均人数	33.3
			A	10		
	14	33	A	33		
	15	33	T	33	T	150
	16	33	T	33	Z	44
	17	32	T	32	計	194
	18	32	T	32	ークラス平均人数	32.3
	19	32	T	20		
			Z	12		
	20	32	Z	32		
フランス語	1	36	L	29	L	29
			E	7	E	74
	2	35	E	35		
	3	35	E	32	B	71
			B	3	計	174
	4	34	B	34		
	5	34	B	34	ークラス平均人数	34.8
	6	34	H1	34	H1	65
	7	33	H1	31	H2	62
			H2	2		
	8	33	H2	33	J	39
	9	33	H2	27	計	166
			J	6		
	10	33	J	33	ークラス平均人数	33.2
	11	33	S	33	S	35
	12	33	S	2	MM	25
			MM	25	MH	33
			MH	6		
	13	33	MH	27	A	39
			A	6	計	132
	14	33	A	33	ークラス平均人数	33.0
	15	33	T	33	T	118
	16	32	T	32	Z	43
	17	32	T	32	計	161
	18	32	T	21	ークラス平均人数	32.2
			Z	11		
	19	32	Z	32		

履修言語	クラス番号	学件数 クラス人数	学件数 内訳	内訳	学部別人数	学部別人数
中国語	1	29	L	29	L	36
	2	31	L	7	E	134
			E	24	B	138
	3	31	E	31	計	308
	4	31	E	31	ークラス平均人数	30.8
	5	31	E	31		
	6	31	E	17		
			B	14		
	7	31	B	31		
	8	31	B	31		
	9	31	B	31		
	10	31	B	31		
	11	34	H1	34	H1	53
	12	34	H1	19	H2	101
			H2	15	J	82
	13	34	H2	34	計	236
	14	34	H2	34	ークラス平均人数	33.7
	15	34	H2	18		
			J	16		
	16	33	J	33		
	17	33	J	33		
	18	36	S	36	S	68
	19	36	S	32	MM	37
			MM	4	MH	66
	20	36	MM	33	A	78
			MH	3	計	249
	21	36	MH	36	ークラス平均人数	35.6
	22	35	MH	27		
			A	8		
	23	35	A	35		
	24	35	A	35		
	25	34	T	34	T	294
	26	33	T	33	Z	104
	27	33	T	33	計	398
	28	33	T	33	ークラス平均人数	33.2
	29	33	T	33		
	30	33	T	33		
	31	33	T	33		
	32	33	T	33		
	33	34	T	29		
			Z	5		
	34	33	Z	33		
	35	33	Z	33		
	36	33	Z	33		
ロシア語	1	36	L	11	L	11
			E	11	E	11
			B	14	B	14
					計	36
	2	21	H1	4	計	21
			H2	12		
			J	5		
	3	28	S	13	計	28
			MM	4		
			MH	3		
			A	8		
	4	15	T	15	T	15
	5	9	Z	9	Z	9
					計	24

令和5年度入学定員は令和4年度から変更なし
※ 令和5年度入学定員　2,530人
※ 令和5年度入学者数　2,597人
★2018年度より第1希望・第2希望の二言語を記載し、第1希望言語の履修を強く希望する場合には、その旨を記載させるよう外国語選択届の様式を変更。
★学修効果の観点から各クラスを37名を上限とし、一部の学件は第2希望言語にクラス分けを実施。
なお、第1希望言語の履修を強く希望した学件は、必ず第1希望言語を履修するようにクラス分けを実施。

第２部　外部評価報告書

1.　外部評価委員会次第

日時：令和 6 年（2024 年）2 月 21 日（水） 9 時 30 分～11 時 00 分
会場：ZOOM によるオンライン開催

出席者
外部評価委員
　　東　淳一（神戸学院大学 グローバル・コミュニケーション学部　教授）
　　ヨコタ村上孝之（大阪大学人文学研究科　准教授）
外国語 II 部会幹事
　　林良子（部会長・ドイツ語幹事：国際文化学研究科　教授）
　　中畑寛之（フランス語幹事：人文学研究科　教授）
　　高田映介（ロシア語幹事：国際文化学研究科　講師）
陪席者
鈴木広隆 教養教育院 評価・FD 専門委員会 委員長（工学研究科 教授）

当日のスケジュール
9:30　開会あいさつ、参加者自己紹介
9:40　自己点検評価の概要説明と前回外部評価からの改善点等について（林、中畑、高田）
10:20　質疑応答
10:30　外部評価委員による講評
11:30　閉会のあいさつ、終了

外　部　評　価　委　員　報　告　書

令和　6 年　3 月 15 日

国立大学法人神戸大学
大学教育推進機構教養教育院
外国語第 II 教育部会　御中

神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部
教授　東　淳一

外部評価委員として国立大学法人神戸大学大学教育推進機構教養教育院外国語第 II 教育部会が実施した自己点検・評価書を審査し、当該組織の活動に関して次のとおり報告いたします。

意　見

○　特に優れている点

未修外国語、つまり一般的にいわゆる第二外国語と称される科目群は、日本の大学においては、削減されたり廃止されたりする傾向が強い。そのなかで神戸大学については、1年次必修のベーシック科目、さらに2年次及び3年次に展開される選択科目としてのアドバンスト科目が適切なカリキュラム構造をもって配置されており、神戸スタンダードにうたわれる「多様性と地球的課題を理解する能力」の修得という教育目標を体現すべく、未修外国語の重要性が明確に理解できるカリキュラムを実現している。

全体のカリキュラム内において、配置可能な未修外国語の時間数は当然限られてくるが、選択科目とはいえ、2 年次、3 年次まで学生がよりハイレベルの未習外国語科目を履修できるのは大きな魅力である。

○　特に改善を要する点

該当なし。

○　全体的講評

未修外国語の履修が 1 年次、あるいはせいぜい 2 年次で終了するカリキュラムではなく、縦に長く、つまり上級学年においても選択科目として未修外国語ができるというのは大きな魅力となっている。運用能力を 1 年次に集中的に高めるため、1 年次の必修科目数を大幅に増やすという考え方も可能であるが、実際に未修外国語に対して最初から大きな期待と興味をもっている学生は、さほど多くはないと考えられる。他方で、学修を進めるにつれて、当該未修外国語により大きな興味を示すようになり、さらに進んで深くその言語を究めたいという学生は少数であっても必ず存在する。教員側としては、ヒューマンリソースと予算を集中的に 1 年次に投入して授業時間数を多く確保しそこで未修外国語の授業は終了とするのか、あるいは下級年次での必修科目数は少なめにしておき、上級学年になってからさらに当該言語を履修し学修を深めたいという学生に応えるため、需要を見極めつつハイレベルの選択科目を上級学年でも提供するのか、という選択に迫られる。現状のカリキュラムを見る限り、神戸大学では後者の道を選択されていると見受けられる。この方針は学生の未修外国語に対する興味、学習意欲の傾向にマッチしていると考えられ評

価できる。

さて、1年次の必修科目においていかに言語の運用能力の養成をはかるのかという点については、今後さらなる授業方針の検討が必要であるように思われる。なぜならば、今まで受講生が全く学習した事がない未修外国語の構造を短期間に理解させて十分な語彙を習得させ、さらには当該言語の運用能力を高めることを短期間で行う必要があるからである。現在、英語教育現場においては、小学校から授業が必修化されており、このため、過去に比べれば、中学校での学習内容、そしてそれに続く高等学校での学習内容もかなり高度なものになっており、学習すべき語彙数も増加している。また、以前より Communicative Approach をベースとした授業が推奨されており、TBLT などタスクベースの教授プロセスも強調されてきた。しかしながら、相変わらず実効が伴わず、Form つまり言語構造をどう教えるのか、授業活動での受講生のエラーをどのように訂正すべきかなど、依然として根本的な問題が解決されず、Communicative というスローガンだけが独り歩きしている状況にある。このような状況において、PPP（Presentation、Practice、Production）方式で文法構造を教授する方法が最近クローズアップされてきている。つまり、かつての Audio-lingual Habit Theory とも結びつくような、「型」を十分練習させてから応用的パフォーマンスへと導く教育スタイルである。未修外国語の授業時間数と比較すれば十分な授業時間をもつ英語教育ですらこのような状況にあり、単に Communicative という理想の理念に振り回されるのではなく、未修外国語の教育、特に下位学年での必修授業においては PPP 方式での集中的な授業展開を検討されるのもよいのではないかと思われる。

先進的な教育メディアの活用も未修外国語の授業では重要である。LMS を活用した反転授業的なアプローチもすでに導入済みで、十分に先進的な試みが行われている授業もあるが、さらにより多くの未修外国語の授業を通じてこのような試みに挑戦されることを期待したい。なお、これに関連し、AI の活用も視野に入れられるとよいと思われる。OpenAI の AI ツール、Claude 3、Llama 2、Gemini シリーズなどを使えば、各種言語によるエッセイやストーリーを容易に自動生成できること、またそれらに対して多肢選択問題などを瞬時に生成できることはよく知られている。物理学、経済学、生物学などの内容について「知識」を問う場合には、AI はまことしやかに嘘をつく、いわゆる Hallucination を作り出すことがある危険が知られている。ただ、ある条件でエッセイやストーリーといった「言語を生成せよ」という命令に対してはほぼ間違いのないアウトプットを生成してくる。もちろん内容の真偽については教授者が確認する必要があるものの、アウトプットとしての「言語」にはまず問題が生じることがない。なぜならば、これらは「大規模言語」モデルだからである。外国語教育ではさまざまなシーンでの複数人による会話が教材として利用されることが多い。実は、生成 AI の各種ツールはこのような特定シーンでの会話、あるいは特定の目的をもった会話も適切なプロンプトを与えることで生成してくれる。また、英語で試した場合であるが、会話のテキストに加えて、いわゆる「ト書き」もカッコ付、あるいはイタリクス体で追記してくれる。さらに、もしも会話の音声が必要であれば、Amazon Polly、Google Cloud、あるいいは Microsoft の Audio Content Creation などを利用して TTS 合成音声を生成すればよい。最近では、HeyGen のように AI ビデオ生成サービスも増えてきている。高品位の合成音声を作ってくれるだけではなく、人間の姿をアバターとして使いそのアバターにリップシンクをさせ、さらには手や上半身の自然なジェスチャーも追加してくれるサービスである。なお、このような AI ビデオ生成サービスを利用している我々教員の写真をアップロードすることで、自分自身をアバターとして動作

させることも可能であり、日本語、英語、ドイツ語、ロシア語など、どのような言語を合成音で選んでもリップシンクとジェスチャーは自然に表示される。もちろん、Google や Microsoft など別の TTS 音声合成サービスで生成された合成音声を取り込んで使用しても同じことができる。このような学習用素材と LMS を組み合わせて使用することで、より効率的に担当教員のニーズにマッチした独自教材が作成できるようになると考えられる。

「今の若者はものごとを深く究めようとしない」と嘆く人も多いが、実際にはある分野の内容を突き詰めて学びたい、特にある未修外国語を究めてその言語が使われる国、地域のことを深く学びたいと考える大学生も少数であったとしても必ず存在する。伸びが期待できる学生には十分な学習機会を与えるという、このような現状に即したカリキュラムにより授業展開が行われていることは大変好ましい。ただ、このような魅力的なカリキュラムを維持するためには、当然、十分なヒューマンリソースが必要であり、専任教員の献身的な努力と、非常勤講師獲得のための予算の裏付けが必須である。困難は多いと思われるが、今後もこの方針を堅持して未修外国語の教育を推進されることを期待したい。

以上

外　部　評　価　委　員　報　告　書

令和　６年　２月　２１日

国立大学法人神戸大学
大学教育推進機構教養教育院
外国語第 II 部会　御中

大阪大学人文学研究科
准教授　ヨコタ村上孝之

外部評価委員として国立大学法人神戸大学大学教育推進機構教養教育院外国語第 II 部会が実施した自己点検・評価書を審査し、当該組織の活動に関して次のとおり報告いたします。

意　見

○　特に優れている点

国立大学法人としてはほかに例をみない、行き届いた、意欲的な語学プログラムを提供している。ネーティヴ・スピーカーの活用などはどこの大学でも語学教育において重点を入れつつあることだが、文系私立大学に匹敵するような（ないし凌ぐような)、内容の充実した留学オプションの提供、選択集中コースの設定、オンラインによる海外の大学との合同授業などは、きわめて特色ある、優れたプログラムだといえる。また、授業のピアレビューは、米国の大学では一般的だが、日本の国立大学法人ではそれほど行われておらず、先進的だといえる。

○　特に改善を要する点

人事の問題と関係があるので、簡単には解決されないとは思われるが、学生の希望通りの授業が選択できていない状況（とくに中国語について）は問題解決のための努力がなされるべきだろう。学術、実用、教養を統合し、すべての点での充実した語学教育を目指すということが謳われているが、教員にも学生にもリソースの限界がある以上、これは非効率ではないかと思われた。語学教育が総花的になってしまい、どの目標も中途半端にしか達成されないという、あぶはちとらずの状態になる可能性を危惧する。むしろ個々の学生のニーズにあった授業を提供していく方向を模索した方がいいのではないか。たとえば、一方に、純粋に教養を高めるための第三外国語があり、他方、学術発表のためだけの第二外国語（未修外国語）の授業を１クオーターのみで提供するとか、あるいは、医事通訳に特化した中国語の授業をするとか（インバウンドや在留中国人が大幅に増加する今日では社会に強く要請されている)、バレエや音楽留学を目指す人のためのロシア語の授業とか、宇宙工学のためだけのロシア語やファッション業界に関心がある人のためのフランス語の授業をするとか。総合的語学教育というのは、聞こえはいいが、非・実用的になるおそれがあり、現代社会が要請するような、語学に優れた人材を必ずしも育てていかないのではないかと思われる。

○　全体的講評

現有のスタッフ、制度、授業体制などの制約があるなかで、それらを最大限に活用して、より語学教育を実現するべく、大きな努力がはらわれているように見受けられた。資

料からは、その目標に向けての教員の強い熱意が伝わってきて、好感度が高かった。たとえば、ハンドブックにも学生の語学習得へのモチヴェーションを高めようという試みや工夫がさまざまに感じ取られ（自分の経験を語ったり、クイズ形式を取り入れたり等)、教える側だけの考えではなく、学生の目線に立った教育をしようという姿勢が感じられたことを高く評価したい。

以上

参考資料　2016年度（平成28年度）外部評価報告書

第4部　外部評価報告書

以上の資料およびディスカッションをもとに、作成いただいた外部評価報告書は次のとおりである。

外部評価報告書(1)

平成 28年 2月 8日

大阪府立大学人間社会学研究科
教授　細見和之

外部評価委員として国立大学法人神戸大学外国語第Ⅱ教育部会が実施した自己点検・評価書を審査し、当該組織の活動に関して次のとおり報告いたします。

意見

○ 特に優れている点

『外国語ハンドブック』を作成して、たんなる単位取得のための案内を超えて、大学で第二外国語を修得することの意味を、異文化との接触や異質な思考パターンとの出会いに力点を置いて学生に説明しているところが、とくに優れていると感じられた。

○ 特に改善を要する点

該当なし。

○ 全体的講評

大学教育においてさまざまな次元での改革が求められるなか、第二外国語の教育においても新たな展開が早急に必要とされている。とりわけ神戸大学においては、4セメスター制の導入という、私には一見無謀と思われる全学的なカリキュラムの刷新のなかで、第二外国語の新たな教育が求められている。そのなかで、第Ⅱ外国語部会は、それぞれの外国語（ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語）の特性を活かしながら、かつ相互に連携をよくとって、改革を進めていると感じられた。『外国語ハンドブック』の作成はその端的な成果の現われである。

また現在、大学教育における成績評価の「標準化」が求められるなか、第二外国語の成績の公正性を確保しつつ、どのようにして語学学習にふさわしい成績評価を行なうべきか、その方法が問われている。そのなかで、神戸大学外国語第Ⅱ教育部会では、優に成績が集中するこ

ともありうるとし、それが全学的に承認されているところには、一つの見識を明瞭に示すものとして、評価できる。

今後の問題としていくつかの改善点をあげておく。

4クォーター制のもとでは、各クォーターで文法事項などをどこまで教えてゆくかの調整がさらにいっそう必要となるだろう。その際には、教科書をある程度統一してゆくことも求められることになるだろう。

さらに、現在、40名程度の受講者で語学教育の行われている教室が、見学の際、いささか広すぎると感じられた。語学教育にいっそう適した規模の教室の確保も今後は必要となるだろう。

以上

外部評価報告書(2)

平成２８年２月１９日

芦屋大学
名誉教授・客員教授 伊川 徹

外部評価委員として国立大学法人 神戸大学 外国語第II教育部会が実施した自己点検・評価書を審査し、当該組織の活動に関して、次の通り報告致します。

意見

○特に優れている点

神戸大学外国語第II教育部会は、言語分野毎に独自の創意工夫を重ねつつ、少人数の教員が自らの負担増を厭わずに少人数クラスを維持、献身的且つ情熱的に言語文化教育の推進と改革に取り組んでいる。

フランスの焼き菓子sablé にlangue de chat(猫の舌)と呼ばれるサクサクとした歯応えのものがある。言語langueとは元来舌の意味である。『広辞苑』は「言語」を、「音声または文字を手段として、人の思想・感情・意志を表現・伝達し、また理解する行為。また、その記号体系。ことば」と規定している。関連する「言語学」については、「(linguistics)人類の言語の系統・変遷・分布、言語相互間の関係などを研究する学問。文献学と異なり、必ずしも文献による実証を必要としない。実証性の強い歴史文法・比較言語学などから、記号論理学的色彩の濃い構造言語学などに至る多くの分野がある。旧称、博言学」とあり、更に「言語教育」とは、「言語能力・言語技術の習得を中心とする教育」であるとする。

果たして大学の「言語教育」は上述の通りで良いのであろうか。『広辞苑』のいう「言語教育」とは1国の言語、つまり「国語教育」を指しているのだ。「国語」とは、「同一国家に属する国民が先祖以来継承し、現にその国民によって使用されている言語」であるから、自己が属さざる国の、おまけに先祖以来使ったこともない言語を習得しようとした場合、「能力」や「技術」の習得以前に、まず、その国家や国民が継承する「文化」を学ばねばならないことは自明の理である。

『自己点検報告書』並びに『参考資料集』によれば、神戸大学の外国語第II教育部会に属するドイツ語・フランス語・ロシア語部会(中国語部会後述)がこのことを正しく理解し、前面に掲げ、学生諸君への履修勧誘を図っていることは大いに評価できる。

とりわけ、各言語の専修科目が学部をクロス・オーヴァーして選択できるシステムは画期的であり、『参考資料集』によれば、交換留学協定を利用して海外の80大学3機関への長・短期学生派遣が可能であることは特筆に値する。

神戸大学は毎年2,600名以上の新入生を迎え入れ、各部会の33名の専任教員（特任外国人教員を含む）が非常勤講師の応援を得て、350クラスに上る外国語第IIの履修者を分担する訳だが、概ね1クラス30名を維持しており、実技的側面を有する初修外国語クラスとしては理想的編成である。しかし、これを維持するために、『自己点検報告書』の「（5）担当者数と負担の問題」にも明記されている通り、専任教員は担当コマ数増や多くの非常勤講師に対するマネジメント業務の負担増を抱え、理事会当局からは財政的見地から非常勤講師の削減要請もあり、所謂板挟み状態にある。使命感を抱く教員各位の善意・献身・情熱に支えらえての現状維持には同情と敬服の念を禁じ得ない。

また、成績評価については、各部会で統一教科書を採用した場合も、高等教育機関としては当然ながら、絶対評価が採用されていることも好ましい。担当教員が教授法研究を怠らず、自身にも学生諸君にも最適の教科書・教具を選定し、委員が実地検分したような優れた施設（Language HUB）・教室（可動収納式PC設置）を利用して、学際的且つ情熱的に授業を展開し、授業内容に沿った適切な定期試験を実施すれば、大多数の学生諸君が秀[S]評価を受けるのは当然であろう。しかしながら、中等教育機関までの相対評価に慣れた学生諸君の不満、高等教育機関に於いてもそれを踏襲すべきだと考える教員の反感は解消されまい。

委員が少々驚いたのは、定期試験欠席者への追試験や不合格者への再試験制度が設けられていることであった。いずれも正当な理由があることが条件だが、前者の実施については、試験当日の家族の不幸・天候不良や事故などに因る交通機関の運行停止などが考えられよう。しかし、当人の急病などの節は、誠に残念な仕儀ながら、再履修を選択するのが妥当ではなかろうか。また、医学部では、共通教育科目の不合格を以って留年が決定的となるの（も理不尽）で、後者を実施し、これを救済する由だが、果たして正当性が担保されていると言えようか。教員のと言うよりも、学部の学生への愛を感じる制度であり、敢えて「特に優れている点」に挙げた。

○特に改善を要する点

外国語学習に殆ど期待を寄せていない学生諸君に対して、現状のさまざまな施策が説得力を持って提供されているかどうかの検証が必要である。

人類も他の哺乳類も飛来する物体を動体視力や反射神経を一瞬に駆使して、これを避けたり、捕獲したりするし、その物体の色・形・硬度や発する光・香・温度を一瞬に察知して敵・味方或いは食物・毒物の判断をする。こうした身体的応用能力によって得た体験を仲間と共有し、世代交代を繰り返した結果、食用の捕獲生物の頭部と尾部がしばしば有毒であると認知した猫は、自身の餓死寸前の捕食であるにも関わらず、鼠や魚の頭部と尾部を食べ残すのである。この点では人類も同様であるが、有毒生物が相手に自己を食べさせることで仲間の繁栄を支える自己犠牲的生物、今風に言えば「神風攻撃的生物」の存在を知った人類は、それを天敵や好ましからざる相手に密かに与えるという悪巧みを着想する。かくして人類は並みの哺乳類から一歩抜きん出たと言えば、聞こえが良いが、比較的に邪まな進化を遂げることになる。尤も、

ここまでなら言語を必要とせず、雄叫びや唸り声だけで充分な世界だ。しかし、悪知恵は更に深化し、仲間や相手への信号(合図)を身振りや記号へ、遂に言葉へ、更には文字へと発展させる。人類の人種への分化と共に言葉は単なるコミュニケーションの道具から言語文化に到達し、人びとは、言語を用いて、こうした先史や歴史を後代の人びとに語り継ぎ、書き残した。かくして、最早我々は言語を用いずに思考・思索することが困難となったが、まさしく言語こそ文化の源泉たる所以である。

外国語に関心のない学生諸君には、上述のような話を伝えた後、「あなたは、ものを考えるときに、パルス信号のようなものしか用いず、言語では考えないのですか？」と問うてみることから始めれば良い。次いで、「日本人の場合は日本語で考え、それを相手に伝えるときは日本語で話したり、書いたりするよね？」「相手の考え方を知りたいときには、日本語で話されるのを聞いたり、書かれたものを読んだりするよね？」と問いかけ、「外国人だって同じようにしないかな？」と促せば、「外国語や外国文化なんか我々には関係ない！必要ない！」とは叫べなくなる筈だ。

ところで、学生諸君の外国語第II選択に際し、国際情勢が如実に反映される現象は全国の大学に共通の話題だが、日本国にとって好ましからざる反応を示す国家の言語が敬遠されるというのは、実は第二次世界大戦中の敵性語の忌避に等しく、好ましからざる現象だ。アメリカ合衆国が敵性語を研究し、大日本帝国に勝利した事実を恐らく知らないからであろう。好ましからざる言語こそ選択されてしかるべきなのだが…

ともあれ、外国語嫌いの原因もしくは遠因が中学校から高等学校への、現今では小学校以来の全く文化的背景を欠いた「コミュニケーションの道具」としてしか教授されなかった(Englishに非ざる)英語教育にあることは疑いようのない事実である。にもかかわらず、『参考資料集』に於ける外国語第Iのメッセージには、今度こそU.K.やU.S.A.の言語文化を追認しようとは記されず、相変わらずコミュニケーション能力の高度化のみが開講目的とされていることに驚きを禁じ得ない。尤も、文物・文化遺産を除き、秦の始皇帝以来4,000年に及ぶ王制とその歴史、日本人に馴染み深い孔・孟・老・荘の儒教思想が否定され、言語文化史が極端に浅くなってしまった現代中国語が外国語第Iと同じ効用を謳うのは已む無しとしよう。

現状ではコミュニケーション能力の養成が前面に出過ぎており、外国語第II設置の第一義的根拠である言語文化修得の側面が強調されていない。

日本語と(Englishに非ざる)英語しか学ばずに一生涯を終える人びとは、例えば附加形容詞は常に名詞に前置されると信じて死んで行くが、フランス語を学んだ人びとはその逆も真なりと知って死んで行く。いずれにせよ死ぬのだ(Memento mori.)が、その見識の差は途方もなく広大な知識の差を生じる端緒に相違ない。つまり、大学が外国語第IIを開講するのは、言語文化教育を通して、学生諸君に発想の転換を促し、人文科学のみならず、社会科学・自然科学両分野に於いても、固定観念に囚われたり、偏見に陥ったりせぬよう学習態度や研究姿勢を正すためであり、市井の語学学校に於けるコミュニケーション能力の養成とは似て非なる主旨なの

である。しかし、その誤解部分が期待され、それを前面に押し立てねば、我々の存在理由を否定され兼ねない高等教育機関の現実を理解していない訳ではない。

独仏国境地帯Alsace-Lorraine (Elsass-Lothringen)の悲劇をフランス側の視点から描いたAlphonse DAUDETの*Les Contes du lundi*所収の*La Dernière Classe - Récit d'un petit alsacien* - を引き合いに出すまでもなく、言語は国民であり国家であり、決して「コミュニケーションの道具」などではない。我々が外国語を学ぶ理由は他者(外国)を正しく理解し、その発想を許容するためである。これを学生諸君に理解させることで外国語教育の第一歩が始まるのだ。その上で、相手国の文化的背景を考慮した基礎的会話、手紙や電子メール程度の作文、辞典を援用して少々複雑な構文の解釈ができ、その過程で対象言語のEnglishへの派生やEnglishからの借用が確認できれば、外国語第II設置の所期の目標に到達したと判定できよう。

Englishはもとより西欧現代諸語を体系的に学ばせるのであれば、日本語教育に古典や漢文が援用される如く、本来は西洋古典語を同時に開講すべきだが、2年次或いは3年次に専修科目としてラテン語やギリシア語(委員勤務先では西洋古典研究I・II[3年生配当専門教養科目:2単位×2])も選択肢として加え、西欧現代諸語へのさまざまな影響を追認させるのも良かろう。

また、先般の外部評価委員会では、語学教授法の一環として、例えば小説や詩歌が好みではない法学部や経営学部などの学生諸君には、テクストとして*Le Monde, The Times, The Wall Street Journal, Frankfurter Allgemeine Zeitung, ИЗВЕСТИЯ, La Repubblica,*『人民日報』などの政治・経済欄を選ぶことも可能だという意見に対して、それは専門教育課程の教員が担当するのが理想だという反論があったが、それでは専門科目に既存の「外書購読」そのものになってしまうではないか。本提案は言語教育を効果的に推進すべく、彼らが興味を抱き、読んでみたいと思うような教材を提供することが主眼なのである。担当教員に少なくとも本朝の新聞の政治・経済欄を読み、理解できる能力があれば、当然ながら、自己が専門とする言語で記された新聞の当該記事を読める筈だ。そこでは勿論政治・経済も語られるが、飽くまでも学生諸君が書かれた内容を正確に解読できるかどうかを試すための本物の教材les documents authentiquesとして選択されるに過ぎない。我々には、教員にも学生諸君にも最適の教材・教具を作成或いは厳選し、担当授業に最大効果を期する責務があるのだ。

○全体的講評

全学共通教育が組織的且つ実証的に推進され、学生諸君の満足度も高いようである。

『参考資料集』並びに『自己点検報告書』によれば、大学教育推進委員会が組織する大学教育推進機構の下、大学教育推進本部・国際教養教育院・国際コミュニケーションセンター・大学教育研究推進室が絶妙のヴァランスを保ちつつ連携して、全学共通教育が組織的且つ実証的に推進されている模様である。大学教育推進機構(大学教育推進委員会)は勿論、傘

下の4機関も理事会・学部教授会構成員から選出されたメンバーで組織されており、それぞれの立場や大所高所からの意見を集約し、収斂して方針決定が成され、学生諸君への全学共通教育を学際的且つ効果的に実施すべく、極めて計画的且つ民主的に運営されているように見える。「多数の複雑な組織が意見交換を重ね、果たして教育方針の一本化など可能であろうか？」という見解もあろうが、この機構がいずれの組織の暴走も許さず、相互に或る種の制御統制機能を果たすという特長を持っていることを評価したい。しかしながら、各学部の専門教育との連携及び専門教育への橋渡しについては記述がなく、互いに干渉せざる関係なのであろうか。

平成28年度開始の2学期クォーター制は、学生諸君に前・後期の学期中に短期留学・ヴォランティア活動・インターンシップなどへの参加を可能にし、しかもそれらを原因とする留年を回避できる画期的教育改革である。必ずや大方の学生諸君の支持を得ることであろう。

近未来改革として外国語を含む共通教育科目を１年次と２年次に並列水平配当せず、１年次から４年次まで縦列垂直配当してはどうか？

桃の節句の七段飾りの如く、家人・小者は下段に、左大臣・右大臣はその上段に、五人囃子・三人官女はお内裏様とお雛様のお傍近くに…という序列がそのまま、並列配当した共通教育科目の上位に専門教育科目や演習科目を並列配当するという段階的教育課程編成に応用されていまいか。一般に義務教育と呼ばれる中等教育課程までは、文部科学省の設置基準通りに教科を開設し、同省検定済み教科書を用い、同省教育指導要領に従って生徒諸君を教導しなければならないが、大学教育に必ずしもこれを踏襲すべき科学的根拠は見当たらない。こうした科目配当に起因する上下関係が共通教育担当者よりも専門教育担当者の方が偉いのだという錯覚を学部構成員に抱かせてしまう。しかも前者が所属学部へ戻り、その構成員となった瞬間、学部の利益や意向を優先し、やはり同じ錯覚に陥るのである。例えが正しくないかも知れないが、民主主義国家に於ける極左集団を共産主義国家へ平行移動させると、そこでは彼らは政権護持の極右集団と呼ばれるのと同じことなのである。

話が脇道に逸れたが、既存の水平思考を垂直思考に改めてはどうかという提案である。委員勤務先では教職科目などを除き、学部配当の総ての科目を基礎教養科目・外国語科目・専門教養科目に分類し、既に以下の改革を進めている。共通教育科目（外国語を含む）と専門教育科目（外国語を含む）をそれぞれ期間4年の上向きと下向きの櫛型に配置し、2枚の櫛の歯が互いに噛み合うように両科目を融合させるのである。側面からの同時並行的影響によって、両者がまさしく神戸大学の「神戸スタンダード」の一環である**複眼的に思考する能力の養成**に期待以上の相乗効果を生むに相違ない。共通教育科目は下位に、専門教育科目はその上位に配当するという固定観念を改めると、前者もさまざまな専門知識を得て理解度が今まで以上に高まること、後者も1・2年次に配当し、早くから学部の基礎的専門教育を開始すれば、3・4年次で現行以上に高度な演習や専門教育を施すことが可能となる。学部のエゴイスムや組

繊防衛的発想の解消にも寄与するこうした大胆な教育機構改革は、伝統護持の高等教育機関では不可能かも知れないが、自由且つ柔軟な発想を堅持する神戸大学でこそ実現可能ではなかろうか。しかし、折角始めたばかりの「2学期クォーター制」を利用して学生諸君が短期留学を試みようとしても、例えば工学部や国際文化学部から「1・2年次配当の専門科目を欠席するのか！」とお叱りを受けてしまうかも知れない。これを回避すべく、語学留学先の建築関係や地域文化関係の情報を収集し、帰国後、専門科目の授業で時事教材les documents authentiquesとして提供するなど所謂お目溢しを図る必要が生じよう。

以上

外部評価報告書(3)

平成 28年 2月 8日

京都大学文学研究科
教授 中村 唯史

外部評価委員として国立大学法人神戸大学 大学推進機構 国際教養教育院 教育部門 外国語教育部門 外国語第Ⅱ教育部会が実施した自己点検・評価書を審査し、当該組織の活動に関して次のとおり報告いたします。

意見

○ 特に優れている点

【「未修外国語」の学習目的の明確さ】

現代日本の大学生の内向き志向(国外に対する関心の全般的な低下)と実利志向(世界の多様性に対する知識の不足と理解の低下)が顕著になっている状況を踏まえつつ、「未修外国語」の教育目的を学生に対して明示し、教員もまたこれを自覚化している点が優れている。たとえば「入学者向けハンドブック」等では、「未修外国語」の学習意義として、「英語の知識の相対化」「知識体系の習得訓練」、「教養としての外国語学習」の3点が挙げられているが、これらは情報が一元化し、知がデータベース化しつつある現状に鑑み、それぞれ1)情報源と視点の多元化、2)知識の断片化と独善的理解の回避、3)言語とその背景にある文化・社会の総体的な把握及びそれらに対する関心の喚起を学生に対して促すものであり、適切である。

【カリキュラムの多様性】

授業をセメスターごとに積み上げていく方式を取ると同時に、対象としている言語と文化について学生が自分の関心に応じた領域の知識と理解を深めることができるよう、2年生以上に対して多様なスタイルの授業、多様な分野のテクストを提供している点が優れている。国際交流協定校の学生とのスカイプによる合同ゼミの実施、海外語学研修の実施、HUB室の設置等、プラクティカルで経験的な学習の場の確保拡充により、異文化に対する学生の関心を喚起し、自主的な学習へと導くための工夫(CALL教室の充実等)もなされている。

○ 特に改善を要する点

【関係部局間の協力と連携の不足】

自己点検報告書や参考資料集を読み、外部評価委員会で部会の先生方の話を伺ったか

ぎりでは、部局間の連携には、なお改善の余地があるという印象を受ける。特に1)国際文化学部、国際コミュニケーションセンター、文系学部の英語以外の外国語・外国文化・国際社会等を専門とする教員との連携、2)留学業務を担当する組織および教員間の連携は、できるだけ早急に確立されるべきであると考える。

1) 国際文化学部、国際コミュニケーションセンター、文系学部の英語以外の外国語・外国文化・国際社会等を専門とする部局との連携

現状では、全学教育「未修外国語」の担当は国際文化学部と国際コミュニケーションセンター所属の教員に集中している。とりわけ国際文化学部の教員は、学部や大学院の授業も担当していることを思えば、かなり負担過重になっているとの印象を受ける。大学の部局編成がそれぞれの経緯を経てきていることは承知しているが、今後も全学的に教員の漸減が予想されるなかで外国語教育を効果的に行い、かつ全学的な研究の振興をはかるためには、そのためのキャパシティを持つ教員が全学教育を平等に負担することが、長期的には望ましいと考える。諸般の事情からそれが困難な場合でも、2年次以降向けに開講されている領域別の外国語の授業については、その多様化を図る意味でも、より広範な範囲の教員が担当するのが適切と思う。

2) 留学業務を担当する組織および教員間の連携

外国語教育を担当する部局および教員、国際交流協定等の実務を担当する部局、学生交換等の実務を担当する部局(留学生の受け入れ担当部局と派遣担当部局)等の役割分担や意志決定の手順等があまり明確ではなく、また相互の連携や情報・意見交換が必ずしも円滑には行われていないとの印象を受ける。上記の業務を一元化した組織を作ることは、かえって学生や留学生に対する細やかな指導や対応を弱体化させる可能性があるので必要ではないと思うが、これらの部局の代表者からなる連携のための委員会の権限を明確にし、その活動を活性化させることが、異文化教育全般の円滑な運営のためには望ましいと思う。

○ 全体的講評

今日の日本では、言語を文化から切り離して学術的・商業的コミュニケーションツールとしてのみ捉えようとする傾向(その顕著な表れが英語偏重論)と、国外に対する関心の顕著な低下が進んでいる。また、多様な言語と文化・社会に対する関心を学生に対して喚起する余地が、高校までの教育において十分にあるとは言いがたい。したがって、真の国際化への萌芽を涵養するという課題は、大学の教養教育、とりわけ「未修外国語」にかかっているのだが、それは「未修外国語」が異文化への関心の喚起と基礎的な語学力の養成とを同時的に行わなければならないという困難を抱えていることを意味する。秀・優・良・可・不可の割合を予め定めておく相

対評価が「未修外国語」に馴染まない理由のひとつはこの点にある。

神戸大学の「未修外国語」担当者は、上記の課題と困難とを自覚しつつ、極めて良心的かつ精力的に教育に従事している。授業外でも、インターネットなども活用するなどして、学生のさまざまな外国語、異文化への関心を喚起するように努め、日本人学生と留学生との交流等も積極的に図っている。また世界各地の大学と国際交流協定を結び、留学生の派遣と受け入れを行い、短期語学研修等も積極的に展開している。

ただし、このことによる担当教員の負担は既に過重である。「未修外国語」の授業実施体制については今後も検討を重ねることが望ましいのではないだろうか。全学教育「未修外国語」の授業と、とくに国際文化学部や文学部の専門教育における異文化を扱う授業・外国語を使用する授業との関係を整合的なものにする試み、たとえば相互乗り入れ（専門の授業を2年生以上向けの「未修外国語」の授業としても開放するといったこと）等についての話し合いが、関係部局のスタッフによって行われるべきであると考える。また留学生の受入および派遣業務を含む異言語・異文化教育全般の効率的な運営のためには、各部局間の代表者による情報共有・意見調整のための場の活性化が必要である。

私見では、1年次の週2コマを、1コマずつ別個の授業としていることは望ましくない。英語と違って、一から学習する「未修外国語」の場合には、基礎的な知識を集中的に習得させるべきであり、週2コマの授業を連動させることが望ましい。再履修者に配慮することは確かに必要だが、やはり熱意ある学生に対する教育効果を優先させるべきであると考える。

どの外国語を履修するかの選択は、現在は100%学生の希望に沿っているようだが、そのために非常勤枠の確定が困難である等の弊害が起きている。少なからぬ割合の学生が、必ずしも確固たる履修動機を持たずに外国語の選択を行っているのが実状であるので、大学側で設定した履修者数の制限を超えるクラスが出た場合には、他の外国語の履修へと誘導した方が、異言語・異文化への関心の多様性を、大学全体として確保できるのではないだろうか。

概して神戸大学の外国語教育は、学生に対して行き届いた配慮をし、その自主性を尊重する点で優れており、これを高く評価する。同時にまた、配慮がやや過度になっているかもしれないとの印象も受ける。

以上